

書 評

Diana C. Archibald, *Domesticity, Imperialism and Emigration in the Victorian Novel*

(University of Missouri Press, 2002.)

井野瀬久美恵

「家庭の天使」 コヴェントリ・パトモアの一編の詩から生まれたこの言葉は、ヴィクトリア朝を通じて女性の理想とされ、さまざまな場面、さまざまな形で、女性たち、とりわけミドルクラスの女性たちを束縛しつづけた。女性の居場所、自己実現の場を家庭に限定したこのジェンダー・イデオロギーは、パトモアの詩が書かれた19世紀半ば前後から海の彼方へも拡大を開始する。イギリス人入植地にイギリス人の家庭を根づかせ、未来のイギリス人を確保すべく推進された女性移民活動とともに、である。やがて1880年代にもなると、移民はイギリス人女性にとって「帝国への義務」とまで喧伝されるようになった。とはいえ、「家庭の天使」が育む「家庭のありよう」(domesticity)が帝国とすんなり手を結んだわけではない。なぜなら、このジェンダー・イデオロギーが、イギリス(より正確にはイングランド)という場、イギリス人(より正しくはイングランド人)というネイションと深く結びついていたからである。それゆえに、この理想像は、移民地で多様な矛盾と異議申し立てとにさらされることになった。本書は、その具体的な様子を小説のなかに探ったものである。

まずは本書全体の流れを、著者の主張を絡めながら紹介していくことにしよう。

序文では、近年のヴィクトリア朝移民史研究が概観される。人口圧から生じる移民という人間の動きは、工業化によって社会が成熟し、人口増大の速度が緩和するとともに収束していくと考えられてきた。しかしながら、他のヨーロッパ諸国とは異なり、イギリスの場合、19世紀後半になっても

移民の波は収まらなかった。それどころか、イギリス人移民の数は増えつづけ、炉辺の住人である女性たちをも海の彼方へと押し出しはじめたのである。そこに、イギリスにおける移民目的地の表象の問題が関わっていると考えた著者は、「新世界、あるいはネオ・ヨーロッパ」とイギリス（正確にはイングランド）との「社会的対話」(social dialogue)がおこなわれた場のひとつとして、小説に注目する。そして、小説のなかに、中心（＝イギリス）と周縁（＝移民先）の「対話」を探るとともに、イギリスの中心性、ナショナル・アイデンティティと深く絡む「家庭の天使」という理想像、ひいては「中心／周縁」という線引きなどに疑問を投げかけていくのである。

以下、4章に渡って小説の具体的な分析がおこなわれることになる。この構成は、ヴィクトリア朝人の主な移民先であった4つの地域　カナダ、オーストラリア、ニュージーランド（を含む南大西洋）、そして19世紀末まで最大の移民先でありつづけたアメリカ　と一致する。各章では、各目的地の現状と絡めて、現地の女性とイギリス人の移民女性とが対比的に描かれ、「家庭の天使」に疑義がつけつけられるさまが浮き彫りにされている。

第1章では、エリザベス・ギャスケルの『メアリ・バートン』（1848）と『従妹フィリス』（1864）に描かれたカナダが分析対象である。メアリ・バートンがジェムとともに向かった新天地であり、フィリスが希望を寄せるエドワード・ホールズワースが渡ったカナダは、工業化が進むイギリスとは対照的に牧歌的なイメージが強調され、それが「家庭の天使」の実現を保証するものとして理解されていた。しかしながら、その牧歌性は、たとえば鉄道技師であるホールズワースの移民が暗示する工業化の進展のなかで解体されるものであり、それがすでに小説のプロットに埋め込まれていたことに著者は注意を促す。

第2章では、アンソニー・トロロープのオーストラリアを扱った3つの作品、『3人の事務員』（1858）、『ガンゴイルのハリー・ヒースコット』（1873）、『ジョン・カルディゲイト』（1879）が取りあげられる。カナダ同様、オーストラリアへの移民においても、いわゆる「田園神話」が果たした役割が大きいとされてきた。しかしながら著者は、トロロープがここに、3種類の女性　移民したイギリス人の妻、オーストラリア生まれの娘、そして労働の場を求めて移民した下層階級のイギリス人独身女性を登場させ、各々異

なる顛末を配したことに注目する。そしてトロロープが、田園神話、および「家庭の天使」というジェンダー・イデオロギーの有効性を認めつつも、暗にその足元を掘り崩していた点を強調するのである。

第3章では、サミュエル・バトラーのユートピア小説『エレウオン』(1872)と『エレウオン再訪』(1901)が刺激したヴィクトリア朝人の南大西洋へのあこがれ、「近代文明からの逃避」の意味が議論されている。ここでも、イギリスの文化的優越が確認される一方、同時にその価値が相対化されてもいる点に著者の関心が寄せられている。たとえば、主人公が結婚した現地人女性は「家庭の天使」の体現者ではありえないが、彼女の存在によって「家庭の天使」というイデオロギーは揺さぶられ、混乱させられたことが重要なのである。

第4章では、最も多くのヴィクトリア朝人が渡ったアメリカにかんして、「家庭の天使」(=イギリス人女性)と「怪物のような女性」(=アメリカ人女性)との多様な対比が議論の俎上にあげられている。とり上げられた小説は、ディケンズの『マーティン・チャズルウィット』(1843-44)、チャールズ・リードの『ブルーマー』(1852)と『さまよう相続人』(1872)、トロロープの『わが生きる道』(1874-75)、そしてW・M・サッカレーの『ヘンリー・エズモンド』(1852)と『ヴァージニアンズ』(1859)、である。これらの小説に描かれたアメリカ人女性は、セクシャルな魅力に欠ける病的な「家庭の天使」とは対照的に、きわめてたくましく有能であり、そしてなにより(皮肉なこと)イギリス人男性にとって非常に魅力的な存在であった。

こうした分析の結果、著者は、ヴィクトリア朝の4つの主要移民地を描いた小説が、移民地のイメージについて、そして「家庭の天使」という理想像をめぐっても、きわめてアンビバレントな態度をとりつづけてきたことを明らかにした。この理想がいかに賞賛されようとも、小説のプロットがそれを裏切っているのである。すなわち、「家庭の天使」というジェンダー・イデオロギーを移民地に広めようとしても、現地の現実との間に矛盾が生じ、それが結果的にその足元を掘り崩すことになったといえる。そのようにして、きわめてヴィクトリア朝的なこのイデオロギーは、ヴィクトリア朝社会が精力的に推し進めた移民活動のなかで終焉に向かいつつあったのだ、と著者は結論する。

「ヴィクトリア朝のテキストをうつつく亡霊」(p.5)である「家庭の天使」という理想像を、この時代に全盛期を迎える移民活動との関連で分析した本書は、移民史にジェンダーの視点を加えただけではなく、女性と家庭のありようをめぐる中心(=イギリス)と周縁(=移民地)の「対話」を小説に読み込もうとした点で、中心と周縁の双方向性を重視する近年の帝国史再考のひとつの流れを反映するものといえよう。

加えて、本書の魅力は、プロローグに記された著者の問題意識にあるとあっていいだろう。

著者の曾祖母、クリスティン・マッカラン・パーカー(1850-77)は、メールオーダーによる花嫁募集に応じて、アメリカ西部、カリフォルニアの炭鉱町ポディに渡り、3人目の子どもの出産とほぼ同時期に自殺したと伝えられている。この不幸な結末が、ヴィクトリア朝の女性移民であった曾祖母の唯一の歴史的「事実」でもある。彼女の人生を想像し語り直そうとした著者は、移民をめぐる疑問を深めていく。スコットランドのミドルクラスの家庭に育った曾祖母が、なぜポディという魅力のない町 酒場は多いが、教会はひとつもない、男だけの町 に移民したのだろう。しかも、同時期、曾祖母のような女性がたくさんいたのである。ヴィクトリア朝社会が精力的に展開した移民という営み。それは何をどう解決したのか。ヴィクトリア朝の娘たちに何がおこっていたのか。

著者のこの問題認識 ヴィクトリア朝という時代が確実に今の自分とつながっているという意識、それは、本書の著者ひとりのものではない。たとえば、ジャマイカとイギリス、とりわけバーミンガムの地方史を伝道活動のなかに重ね合わせ、従来の帝国史のあり方に鋭く斬り込んだキャサリン・ホルの『文明化する臣民』(*Civilising Subject*)(2002)はその一例だ。父の記憶に触発されて伝道協会の資料を丹念に追いかけたホルとは異なり、本書の著者は、いっさいの記録が失われた曾祖母の人生を、幸せだったとは思われない彼女の物語を再構築するために、ヴィクトリア朝社会の移民経験を写しとるメディアとして、小説に注目した。そこに著者は、曾祖母が経験したであろう、イデオロギーとしての「家庭の天使」と、カリフォルニアでの現実の生活とのギャップを探り、彼女の自殺の意味を考えようとした。だからこそ、各章の分析は、「家庭の天使」に込められた意味

合いが植民地の現実によっていかに脱構築されたかに主眼が置かれることになったといえよう。

こうした著者の姿勢ゆえに、本書は、いくつかの問題を引き受けざるを得なくなったといえるかもしれない。ここでは、歴史研究者である評者の立場から、具体的に4点ほど疑問をあげておこう。

第一に、なぜ上記の小説をとりあげたか、についてである。この点にかんして、著者の姿勢は必ずしも明確ではない。作品の受容に関して何らかの基準が示されているわけではない。もっといえば、たとえば、小説というメディアは、「家庭の天使」というジェンダー・イデオロギーを当時の人びとにどのようにイメージさせるのに貢献したのか、たとえば絵画やポスター、説教、移民からの手紙などと比べて、小説の影響力とはどのようなものだったのかについても、問われないままであることが気になる。

第二に、著者が分析用語として用いた「ネオ・ヨーロッパ」(Neo-Europes)という言葉の妥当性の問題だ。環境史家アルフレッド・クロスビーの著書『ヨーロッパ帝国主義の謎』(佐々木昭夫訳、岩波書店、1998年)からとられたこの言葉は、ヨーロッパ人が移民した非ヨーロッパ地域を指す。クロスビーは、ヨーロッパ人は、ヨーロッパとよく似た温帯に属する南北アメリカ大陸、オーストラリア、ニュージーランドに移民して、ヨーロッパ由来の雑草や家畜、ひいては病原菌などを拡大、繁殖させ、生態を一変させたことを問題視した。ヴィクトリア朝の主たる目的地であった4つの地域は、確かにすべて、クロスビーのいう「ネオ・ヨーロッパ」に位置している。しかしながら、「家庭のありようと帝国主義」という著者自身が問おうとしたテーマからも明らかなように、ヴィクトリア朝の人びとは、これらの地域への移民を「ヨーロッパの拡大」として意識していたわけではないだろう。この言葉を用いることにどれほどの意味があるのか、評者には疑問である。

第三に、標題に掲げられた「帝国主義」という言葉の中身についても、著者は多くを語っていない。それは「帝国」なのか、「帝国主義なのか」という問題がはらむ複雑さについては、昨今の帝国史研究でも問題視されているとおりである。

そして最後に、第一に指摘した小説の選択とも絡む、時期的な問題があ

る。本書評冒頭にも書いたが、女性移民に関して質的な転換が図られるのは、言い換えれば、女性移民が「帝国への義務」とまで語られるようになるのは、1880年代以降のことだとされている。そのころから、それまでもっぱら労働力移動の問題として語られてきたイギリス人女性の移民、とりわけミドルクラス出身の女性の移民が、イギリスの文化や価値観の伝播と強く関わるものとして論議を呼ぶようになっていくのである。ところが、本書でとりあげられているのは1870年代半ばまでの小説であり、80年代以降の小説はいっさい無視されている。結論部でも、1880年代から20年余り、移民の黄金時代ともいえるヴィクトリア朝末期への言及はほとんどなく、話は移民が収束しはじめる第一次世界大戦後に飛んでしまっているのである。1880、90年代の小説のなかで女性移民はどのように表象されたのだろうか。

繰り返すようだが、以上の4点は、評者が歴史研究者であるがゆえに気になった問題であるとともに、これまであまりとりあげられなかった小説に対して著者が試みた読みが興味深いがゆえに、惜しまれてならない点でもある。とはいえ、それは、文学以外の専門家が本書の研究をいかに継承、発展させていくかの問題でもあろう。ヴィクトリア朝文化研究は、文字通りの共同研究なのである。本書が求めた対話にどう答えるか、そこに、ヴィクトリア朝文化研究の新しい明日も開かれるような気がする。

(甲南大学教授)

Bradley Deane, *The Making of the Victorian Novelist:
Anxieties of Authorship in the Mass Market*

(Routledge, 2003)

福岡忠雄

例えばThomas Hardyの場合、第四作目の*Far from the Madding Crowd*まで、すべて匿名のまま出版された。つまり、当時の読者はそれら四つの小説を作者名を知らされないままに読んでいたのである。現在の我々なら、これはきわめて奇異な慣行に映ったはずで、読んでいてもどこか落ち着かない思い、Foucaultの言う「所有者の分からない落し物」のような思い、をしていたはずである。ではなぜ、我々には「奇異」と映り、「落ち着かない」思いをするものが、当時は格別奇異なこととされなかったのか。その理由は、作品と作者との関係についての考え方が現在と当時とでは違うからである。当時の読者は、現在の我々が作品にとって作者名は不可欠だと考えるほどには、不可欠だとは考えなかったのである。それをさらに掘り下げていけば、「作者」についての概念そのものの違い、当時と現在では同じく「作者」と言いながら、その意味するものが違うという事実に行き着く。ここから本書の基本的命題が引き出される。すなわち「作者」という概念は決して普遍的・固定的・ahistoricalなものではなく、その時々々の「書物の生産」に関わる経済的、文化的、歴史的諸条件に強く影響され、その諸条件が変化すれば「作者」概念も変化するという命題である。

本書はヴィクトリア朝における「作者」概念の変遷を辿ったものである。具体的には、William Wordsworth, Walter Scott, Wilkie Collins, Henry James等ヴィクトリア朝の作家たちはどのような「作者」(authorship)概念を持っていたか、またその概念はどのようにして作られていったかを考察するものである。つまり、様々な作家たちの様々な「作者」概念を分析し、そのような概念がどのような歴史的背景の中で形成されていったかを検証しようというのである。今「歴史的」といったのは、ある特定の作家の「作者」概念は決してその人の主観的判断、芸術観のみによって成立するものではなく、当時の文化的、社会的背景、作品の受け手である読者との相互関係などが

深く関わっているからで、ヴィクトリア朝の場合は特に「急速な文学の大衆化」という現象にどう対応するか、拡大する読者の要求にどう臨めばいいのか、という問題に対する個々の作家の態度が、彼らの「作者」概念を規定していったと著者は指摘する。

まず最初に取り上げられるのは Wordsworth である。彼の「作者」概念は、一言で言えば「世俗に背を向けた孤高の人、大衆の人気を求めず、志を同じくする少数派の人々の魂に呼びかける超越的存在」であった。これを著者は「ロマン主義的作家概念」と呼ぶ。この概念はその後、様々な修正・偽装をこらしながらも、ヴィクトリア朝全般にわたって影響を与え続けることになる。このような「孤高の人」としての作者像は、従来の見方とそう変わるものではなく、Wordsworth の一連の詩から容易に演繹できるものである。しかし本書の特異な点は、著者が自らの基本姿勢を literary sociology と規定しているように、この概念の形成過程をテキストからではなく、あくまでも当時の social formation との関係の中に求めようとしている点にある。言い換えると、Wordsworth の「作者」概念を thematic に説明するのではなく、materialistic に説明すること、つまり、当時、詩が「経済的」に生き延びてゆくためには「孤高の詩人」という概念が必要であったことで説明しようとしている点にある。それは以下の通りである。十九世紀初頭、読者数、発行部数の点で、詩はすでに圧倒的勢いで拡大を続ける小説の前にマイナーな存在でしかなかった。つまり詩人は marginality を甘受するしかなかったのである。神秘的自然を前にして一人荒野で瞑想にふける孤高の人は、当時の沸騰する活字文化の中で「孤高」を強いられた詩人の姿と重なるものだったのである。このような状況に対し、Wordsworth は敢てその marginality を逆手に取った。すなわち、大衆の人気と文学的完成度は逆比例するものであること、詩人は「売文家」とはっきり一線を画す「超越的存在」であること、小説が読者の「娯楽」を目指すのに対し、詩人は読者の「魂」に語りかけ、「真理」に目を開かせるものであること、などなど。しかし、このような「ロマン主義的作家概念」は同時に「経済的配慮」の産物でもあった。つまり、発行部数において、また安価な値段設定において、小説家に太刀打ちできない詩人は、逆に発行部数を限定、その代わり単価を高く設定して、豪華本として対抗しようとしたのである。言い換えると、詩人がそのよう

な高価な本を購入できるだけの資力を備えた読者層、upper-middleからなる「志の高い選ばれた読者」の魂に訴えかけるには、魂に訴えかけるだけの資質を持つ「孤高の人」を演じなくてはならなかったのである。

これと対照的な「作者」概念として著者が例に挙げるのが、もう一人のロマン派作家 Walter Scott のそれである。長い間彼の小説は著者名を明らかにせず ‘author of Waverley’ との表示が付せられているだけであった。その最大の理由は彼の「作者」観にある。すなわち、Scott にとって「作者」とは「郵便配達夫」のような存在で、重要なのは「受け取り手」を喜ばすことができるような「通信物」を提供できるかどうかの問題であって、それさえ満たすことができるのであれば、「作者」が誰であるかは重要ではない、と考えたのである。「作者」観をめぐって、Wordsworth と Scott の考え方の決定的違いは、前者は「作り手」の個人的存在を強調するのに対して、後者は「受け取り手」の量的存在を重視したことにある。作る側に特権を与えるか、それとも受け取り手側の要求を重視すべきか、つまり「作者」対「読者」という構図は、これ以降基本的対立構図として、ヴィクトリア朝全体にわたっての議論の核となっていったのである。その背景にあるのは、当時の「活字文化」の爆発的増殖、それに伴う「読者」の質量両面における増大・拡散の問題である。ある作家はそのような拡散に文学の社会的役割の重大化を自覚し、それにふさわしい「作者」概念を作ろうとしたのに対して、別の作家たちはそれを文学の大衆化、低俗化の危機と見、その危機に対抗するにふさわしい「作者」概念を作り上げようとしたのである。

著者が挙げる後者の代表は勿論 Henry James である。James 以前の作家は、文学の大衆化に対していわば Wordsworth 的作者観と Scott 的作者観の危うい折衷で対処しようとしてきた。そのために編み出されたのが friendly author という概念である。Friendly author とは、「作者」を特別な個人的存在としながら、同時に大衆的「読者」との関係をも維持するための新しい「作者」概念であり、それを可能にするのが sympathy、すなわち「共感」であった。ここでの前提は、作者と読者の間には共通の価値意識、モラル意識が共有されているということで、それがあからこそ両者は「共感」を通して交流できる関係なのだと言いたのである。James が真っ向から否定したのがそのような「作者」観なのである。不特定多数からなる大衆読者を文学の俗

悪化の元凶と見る彼が、その代わりとして打ち出した「作者」とは、大衆に背を向けた「孤高の人」であった。すなわち、Wordsworth のそれに立ち戻ったのである。しかし、両者の間には決定的違いがある。Wordsworth の「孤高の人」は、孤高でありながらも最終的には文学を通して社会の改善・福利を目指す人であったのに対し、James の場合の「孤高の人」は、完全に「社会」一般という概念を切り捨て、限定された「読者」、特定の感受性の持ち主のみを念頭に置いて創作する人なのである。つまりJamesは、sympathyを介して読者一般との関係をつなぎとめるのではなく、appreciationを資格条件として「読者」を限定し、その限定された読者との関係を通じて文学を守ろうとしたのである。ここにもまた本書の基本的姿勢、すなわち、「作者」という概念を特定の個人の哲学・信条に帰すのではなく、当時の歴史的状況、social formationとの関わりの中で考察するという立場が守られている。すなわち、Jamesの「作者」観を単に彼のidiosyncrasyによって説明するのではなく、文学の大衆化、機械化、低俗化が急速に進む中で、いかにすれば文学の質を守るか、その危機意識の中から生み出されたものであることが明らかにされているのである。

本書は最近の文学研究の傾向を示す典型的な一例である。文学研究はここへ来て「理論派」と「歴史派」に二分された印象をますます強めているが、本書はもちろん後者に属する。しかし、「歴史派」が単に先祖帰りしたわけではなく、軸足はあくまでも歴史的な脈に置きながらも、「理論派」が案出した様々な斬新な概念を自由に取り入れている。本書の主題である「作者」概念は、二十世紀全般にわたって「理論派」が放逐に躍起となった概念である。New Criticismしかり、Roland Barthesしかり。しかし、この「亡霊」はついに exorcize されることがなかった。だからと言って、著者は「理論派」を否定しようとはしない。「理論派」の立てた様々な概念を、自らの歴史的考察の中に取り込み、新しい形での歴史的考察を試みているのである。その意味で、「理論派」と「歴史派」に揺れ動く我々研究者にとって、一つの優れた融和策を提示してくれていると言える。

(関西学院大学教授)

John Gardiner, *The Victorians: An Age in Retrospect*
(Hambleton and London, 2002)

高田 実

「衰退」から「繁栄」へ。人は華やかなりし過去を追憶し、いまの自分を奮い立たせる。自らの衰えに気づけばなおさら、時間上の他者がもたらす心の安寧を求めたくなる。それは懐古する者の願望が投影され、あるべきものとして構築された歴史のかたちであることが多い。「繁栄」の時代は往々にして誇張されがちである。しかも、歴史教科書問題が示すように、過去への郷愁は現代世界に新たな問題を引き起こす。生者が死者を蘇らせている。

この「栄光」へのノスタルジアは世界的な広がりをもっている。イギリスもその例外ではない。「ヨーロッパとアメリカの狭間」で自らの存在価値を示さねばならなくなった時、＜イギリス人とは何か＞という問いはより深刻なものとなる。その苦悩の深まりに比例して、「栄光」への憧憬は大きくなる。幸いなことに、アングロ・サクソンの「自由」、エリザベス時代の「繁栄」、「最初の工業国家」の成功、「大英帝国」の支配など、イギリス史は「栄光」の参照系に事欠かない。

このような文脈のなかで、1980年代以降、ヴィクトリア時代とそこに生きた人々のイメージは、政治と文化の最大の争点となった。サッチャー首相が「自立」や「自尊心」を核とする「ヴィクトリア朝の価値観」(Victorian values)の復活を本気で唱道し始めたからである。彼女はその価値観の実在性を疑わなかった。歴史や文学をはじめさまざまな分野で、この価値観の問い直しが行われるようになった。ここで取り上げるガーディナー著『ヴィクトリア朝の人々：ある時代の回顧』も、こうした知的背景のもとで書かれた書物である。

本書の内容を簡単にまとめておこう。課題は、ヴィクトリア朝に生きた人々についての評価が、20世紀においてどのように変化したかを追跡することにある。全体は大きく二つに分かれている。

第一部はヴィクトリア朝の人々へのイメージがどのように変化したのか

を時系列的に追う。各時代のキーワードが各章のタイトルになっている。

まず、ヴィクトリア朝的なるものの必須アイテムが列挙される。義務、勤勉、道徳感、家庭信仰と女性=母の役割、福音主義、帝国、工業化と都市化、階級と貧困、自由主義的な政府、平和と自由貿易、公私の明確な区分など。しかし、そこに含まれる一種の堅苦しさは当時の人々に自己疑念を生みだした（第1章：ヴィクトリア朝の人々）。その反動が噴出するのが20世紀初頭である。第一次世界大戦を画期として、1920年代までにミドル・クラスを担い手とした「反ヴィクトリア朝主義」（Anti-Victorianism）という「巨大な情緒的アイデンティティ」の流れが支配的となる。しかし、その淵源はヴィクトリア朝の家庭におけるしつけへの反発にあったというパラドックスが示される（第2章：反ヴィクトリア朝主義）。

とはいえ、歴史は一直線に進まない。反ヴィクトリア主義の運動は多様で分散的であった。他方でヴィクトリア朝的なるものは「生き残り」、大戦後その傾向が部分的に強化される。その連続性は、「情緒的な過去との結びつき」、つまりヴィクトリア朝初期の「新鮮さと楽観主義」を憧憬することで、現実の不安から「逃避」したいというヴィクトリア朝中期生まれの人々の願望から生まれたものであった（第3章：生き残り）。

しかし、これに第二次世界大戦が打撃を与える。1940年のイングランドを「かなり古風なヴィクトリア朝の家庭」と描くG・オーウェルの指摘は戦時中こそてはやされるものの、戦後は大きく変化する。ヴィクトリア朝世代の減少と関連して、眼前からヴィクトリア朝的なるものが消え始める。これに代わり、消費主義、大衆娯楽、道徳的相対主義の文化が登場する。礼讃された家族もいまや核家族化の波に飲み込まれる（第4章：戦争）。その結果、1960年代には「寛容な社会」（permissive society）が出現する。「怒れる若者」が担い手となった「若者文化」が社会を席捲し、帝国、家庭、宗教などの伝統的権威への異議申し立てを繰り返す。しかし、ここでも過去との完全なる訣別は起こらない。他方で、ヴィクトリア朝へのノスタルジアとその低俗的な再生が進む。時代の不安が相対的な安定期に対する郷愁を促し、「人々はヴィクトリア期に自分たちが見つけたいと願う価値観を見出し始めていた」のである（第5章：若者）。この流れの先にサッチャーの「ヴィクトリア朝の価値観」論がある。過去を持ち出して戦後の総決算

を図る首相に対して、過去の「悪用」だと批判が投げ返される。なにが真のヴィクトリア朝的なるものか、論争が巻き起こった。しかし、著者はそのことよりも1980年代に過去が商品化される方法に興味を示す。アンティーク趣味、映画、テレビ番組、古典小説の再興などを通じて、「遺産」(heritage)が産業化する。市場志向的な過去へのノスタルジアが進行し、それが過去の見方の一元化を進めた(第6章：遺産)。

第一部の最後では、歴史の書かれ方の変化が概観される。ヴィクトリア期のアマチュア歴史家の時代から20世紀の歴史の専門職化への流れがフォローされる。世紀末の専門職化と組織化の進行、1930年代の進歩史観批判と大学の歴史研究の関心、第二次世界大戦後の歴史のバランス回復と1960年代の転換が跡付けられる。最後に著者が言わんとするのは、一般民衆を置き去りにした歴史研究の専門職化の欠陥である。民衆の歴史的な関心に訴える生きたしかし正しい知識にもとづく歴史の再生が求められる、と(第7章：歴史)。

後半の第二部は、ヴィクトリア朝に生きた人々の伝記叙述の変化を通して、ヴィクトリア朝観の推移を追う。まずはストレイチーの伝記手法(ジョンソン博士の原則への回帰とフロイ德的な精神分析の導入)を再評価したうえで、伝記の叙述スタイルがどのように変化したかを概観する。手紙や日記の公刊に助けられ、人間味の叙述(humanisation)が進んでいること、またアートとしての伝記のあり方が重要視されていることが強調される(第8章)。著者はその事例研究として、ヴィクトリア女王(第9章)、ディケンズ(第10章)、グラッドストーン(第11章)、ワイルド(第12章)の伝記手法の変化を検討する。誰をとっても人間的側面の強調という傾向がみられるし、ディケンズは遺産産業化の対象となる。また、自由主義のチャンピオン、モラリストとしてのグラッドストーン像が再検討され、多面性が描かれる。ユニークなのはO・ワイルドのホモセクシュアリティの描かれ方の変化、特に1980年代における再評価に表される性道徳観の変化である。すべてに共通するのは、人物を描く主体の思いによる人物像の被構築性、それによるヴィクトリア朝的なるもの評価の変転である。

こうして、この本は20世紀におけるヴィクトリア朝の時代と人物の表象の変化を跡づけている。そこからはヴィクトリア朝的なるものの連続性と

断続性、その被構築性を読み取ることができる。また、世代論を交えながら、時代の不安にさいなまれつつ、その特徴が自己否定的、弁証法的に展開する様が鋭く描き出される。逃れようとして逃れられない、ヴィクトリア朝的なものの呪縛とそれとの格闘が活写される。さらに、伝記自体の被構築性を追いつつ、同じヴィクトリア朝の人びとがまったく違った姿で描かれていく伝記文化自体の楽しみ方も手解きしてくれる。

教えられることの多い本ではあるが、いくつかの疑問も残った。ひとつは、時代の精神をどう捉えたらよいのかという問題である。どの社会にも、ある時代に生きる人々が共有せざるを得なかった精神や価値観が存在したといえるかもしれない。しかし、その時代精神がどのようにつくられ、どのような形で共有されたのかは、さらに突き詰めて検討されなければならない。ヴィクトリア朝の場合、「ヴィクトリア朝的なもの」がおしなべて共有されたのではない。その創造主たちがいたはずだし、それを受容し、普及した人々がいたはずだ。また、同じ空間に生きていても、それを共有すべきとは想定されていなかった人もいた。時代精神の担い手と受け手、共有の方法とそこに働く境界線の力学がさらに細かく追究されなければならないだろう。

さらに、それを継承する、あるいは批判する時代の精神は「反ヴィクトリア朝主義」として括られるが、おそらくそれはハイブリッドであったはずだ。主題との関係では、そのようにしか括れないのかもしれないが、対抗思潮の成分分析が必要ではないだろうか。

ヴィクトリア朝的なものにせよ、それへの反対潮流にせよ、それらを構成しているものの多面性と横断性を基礎にした総合のうえにたってはじめて時代精神の立体的な姿が描けるのではなからうか。少なくとも、これまでの歴史研究はこうした二項対立を克服するための素材を提供してきたように思える。決して歴史研究の専門化が問題なのではなく、その総合の方法が改めて再検討されなければならないのではないだろうか。たとえば、J. Harris, *Private Lives, Public Spirit: a Social History of Britain 1870-1914* (Oxford University Press, 1993) などはこの問題を考えるのに適した好著である。

次に、「ヴィクトリア朝的なもの」の連続性と断続性の関連について、

その連続性を担保した力は何か。著者はその特質が単純に否定されていったとも、単純に継承されていったともしていない。それは理解できた。それでも、評者にはどうしてもヴィクトリア朝的なるものの金太郎飴が見えて仕方ない。玉ねぎの皮を剥くように1枚めくればその下にまたあの時代が見えてくる。しかし、ヴィクトリア朝以降に生きた人びとの参照系は、ヴィクトリア朝だけだったのだろうか。世代によって参照系の基準は違わずだし、それをヴィクトリア朝の遺産の尺度で計ることが果たして妥当なのだろうか。ものさしの多元性が、少しずつずらして重ねる複数のものさしが必要ではないか。

また、何よりもヴィクトリア朝を参照する歴史の力はどこから、どのように生まれてくるのだろうか。時代の不安が、安定を志向させるという共通のシェーマはわからないではない。しかし、その繰り返しだろうか。歴史の連続性と断続性をもたらす力をもっと特殊なものではないだろうか。そもそも、なぜ不安が過去を憧憬させる方向に向かい、今日の規制緩和論のように過去を全否定して前方へ飛躍する力とならないのかの解明も必要だ。

もっと歴史の中に蠢く多元的な力を評価すべきではないか。別の言い方をすると、著者が触れる背景とヴィクトリア朝的なるものへのプロとアンチの対抗的運動のあり方とが具体相においてどうしても焦点を結ばないのだ。現象的に見えてしまう。そのままでは、玉ねぎの皮を剥き続けるしかなくなるのではないか。

第三に、ヴィクトリア朝を眺めるグローバルな視点が必要ではないか。人は他者との対話の中で自己のアイデンティティを確立する。ヴィクトリア朝的なるものへの意識は、時間上の他者だけではなく、空間上の他者との対話によっても創造されたはずだ。18世紀のブリTONズ創造を論ずるリンダ・コリーとの対比を持ち出すまでもなく、競合する他者、「劣った」他者との関係性のなかで、ヴィクトリア朝的なるものが誇りの対象として構築されたはずである。また、この特質は「文明化の使命」のもと、制度化されて海外へと移植されていった。さらに、イギリスの衰退を認識させ、改めてヴィクトリア朝的なるものの価値を見直させる契機になったのも外の力である。

そうした外から、また周辺から眺める視点が不可欠な、ポストコロニアルな時代なのに、著者の分析はおそろしくドメスティックで、中心の視点だ。もちろん帝国への言及が全くないわけではない。問題はそれがヴィクトリア朝のアイデンティティ形成とその再生産の議論にどこまで内在化されているかである。ナショナルなアイデンティティは相対化されるべき時代を迎えている。イギリス人のアイデンティティに拘泥しないですむわれわれは、その相対化のために有利な地点にたっているといえよう。それも外からの視点だ。

最後に、どうしても強調しておくべきは、イギリス史のサクセス・ストーリー化の中で、ヴィクトリア朝的なもの、またそこに生きた人々をどう位置づけていくかという問題である。19世紀中葉のイギリスをめぐる歴史研究では社会、国家、帝国のあらゆる次元でサクセス・ストーリー化が進行しているように思える。「異常なまでの社会の安定」、利害を超えた「小さいが、規制的な」国家の力、「国際的公共財」を提供し、「国際秩序」をつくって、グローバリズムの先駆をなした帝国、これらがヴィクトリア期の「繁栄」を支えた、と。このなかに、どの時代においても回帰されるヴィクトリア朝的なものの存在を定置するとしたら、それはどんな歴史像になるだろうか。この面でも相対化が必要だ。特に、著者は専門化され無味乾燥な歴史をより生き生きとしたものにすべく、伝記の効用を強調している。しかも、女王の、首相の、国民作家の人間味あふれる物語が書かれつつあるという。そこでは、アートとしての伝記が、明確に一つの政治的なメッセージををもたらす危うい可能性も否定はできない。日本における司馬遼太郎の作品をめぐる議論が示すように（成田龍一『司馬遼太郎の幕末・明治 『竜馬がゆく』と『坂の上の雲』を読む』、朝日選書、2003年）。

こうしてみると、最終的にはガーディナー自身の歴史観がどのようなものなのかという問題に行き着くように思える。回顧される「繁栄」の時代は、回顧する者の視点を問う。と同時にそれを鳥瞰する研究者自身の立場表明を求める。二重の意味での視点が問われている。

（九州国際大学教授）

Valerie Browne Lester, *Phiz: The Man Who Drew Dickens*
(Chatto & Windus, 2004)

梶山秀雄

チャールズ・ディケンズの長編第一作『ピクウィック・ペーパーズ』の発端となったのは、1835年にロバート・シーマーがチャプマン・アンド・ホール社に持ち込んだ、釣りや狩りを主題とした滑稽な絵物語の企画だった。既に戯画家としての地位を確立していたシーマーに対して、『マンスリー・マガジン』にいくつかの「スケッチ」を発表していたとはいえ、まだまだ駆け出しのディケンズが抜擢されたのにはそれなりの理由がある。当時は、まず版画があり、それに従って作品を書くという絵物語のシステムが確立されており、挿絵画家の意図に黙って従いそうな新人作家を起用するのが好都合だと編集部は考えたのである。

ところが、ディケンズはシーマーの構想を陳腐な二番煎じとして攻撃するばかりか、「本文から図版が生まれてくるほうが、どれだけよいか分からない」と自らが作品のリーダーシップをとることを要求した。結局、ディケンズに強引に押し切られる形で『ピクウィック』は離陸したものの、分冊形式の第一号が刊行された直後に、シーマーが謎の自殺を遂げたことにより、このコラボレーションは唐突な結末を迎える。もともと鬱病の気があったシーマーの自殺に、この造反劇がどれだけ影響を与えたかは定かでないが（『ピクウィック』をめぐる折衝が自殺への引き金になったとして、遺族はディケンズに何度も謝罪を要求している）。この弱冠24歳の野心を持つ青年が、版画と物語のバランスを転倒させ、イラストが挿絵となった瞬間に、ヴィクトリア朝小説の扉は開かれたのである。

Valerie Browne Lester, *Phiz: The Man Who Drew Dickens* は、シーマーの後任として『ピクウィック』の挿絵を担当し、その後も数々のディケンズ作品を彩ることになる挿絵画家、ハブロー・ナイト・ブラウン（通称フィズ）の評伝である。これまでもディケンズに関係する挿絵画家を扱った研究書は存在するが、フィズから数えて四代目の子孫にあたる筆者の手になる本書は、初公開の手紙や挿絵、スケッチを交えながら、ディケンズとのパ

ートナーシップ、さらにはフィズの出生の秘密を含むブラウン家の歴史や私生活を丹念に描き出しており、ディケンズ研究者だけではなく、ヴィクトリア朝文化研究者にとっても示唆に富む、決定版と言っていいだろう。

ユグノー教徒を祖先に持つブラウン家は、17世紀に入ってロンドンのスピタルフィールズに移住し、しばらくは絹の製造に従事していたが、やがて時計作りに商売を鞍替えすることになる。筆者によれば、ブラウン一族には緻密な作業を得意とする才能があり、フィズの祖父サイモンや叔父のヘンリーは美しいレタリング文字でロンドン中の評判になるほどだったという。扉絵の流麗なレタリング文字と挿絵の細部の書き込みを見れば、この才能がフィズにも脈々と受け継がれていることが分かる。そのフィズが誕生したのは1815年の7月10日、戸籍上はウィリアムとキャサリンの14番目の子供ということになっているが、実際は長姉とナポレオン帝国時代の陸軍大尉ニコラス・ハプローとの間に生まれた子であり、この出生の秘密は家族の間でも語られることがなかった。形式上の父母ウィリアムとキャサリンは、金銭上のトラブルを抱え、引っ越しを繰り返しており、不和を抱えたフィズの家庭は団欒とはほど遠いもので、やがて出会うディケンズのそれと重なり合う。父の大尉はフィズが生まれる前月にワーテルローの戦いで消息を絶ち、7年後には養父も失踪という生い立ちが、深い傷跡を残したことは想像に難くないが、そうした複雑な家庭環境ゆえに、フィズ自身はよき家庭人となり、それがディケンズと袂を分かち伏線になっているあたりは、上質のヴィクトリア朝小説を読んでいるような錯覚にとられる。

その後、「孤児」となったフィズが、印刷工に徒弟奉公に出され、めきめきと頭角をあらわしていくさまは、ディック・ウィットイントンの民話に描かれる「よい徒弟のロマンス」を地で行く感がある。やはり正規の教育を受けずに、民法博士会の速記者として活躍するかたわら、小説家としてのキャリアをスタートさせたばかりのもう一人の孤児と出会うのは時間の問題であったと言えるだろう（実際に、フィズのスタジオは記者時代のディケンズの住居と同じ場所にあり、二人とも大英博物館付属図書館の観覧券の交付を受けていた）。紆余曲折の末に、シーマーの後任として『ピクウィック』の挿絵を担当することになったフィズが、サム・ウェラーという人気キャラクターの登場という幸運もあり、絶大な人気を博したのは周知

の通りであるが、ではこの二人のパートナーシップはどのようなものであったのか。

シーマーとの確執の余波というべきか、ディケンズはフィズの挿絵に必ず事前にチェックを入れ、頭の中にあるイメージと齟齬がある場合は躊躇なく書き直しを要求したという(50)。フィズはこうした注文をむしろ歓迎し、細部にこだわるブラウン一族の遺伝子を遺憾なく発揮し、背景に物語の筋とは関係のない絵画や肖像画、そしてH. K. B.の書名をこっそり入れるといった遊び心をもって応じた。テキストが間に合わない時には、フィズがおおよその指示をもとに想像力で物語を補完することも度々で、『ピクウィック』は小説家と挿絵画家の共同作業によって順調に巻を重ねていった。このような良好な関係が築かれたのは、挿絵を付属物とした小説の自律化をめざす一方で、ディケンズが挿絵画家を対等なパートナーとして遇したことにある。次作『ニコラス・ニクルビー』の取材旅行に出かけ、構想中の作品の舞台や登場人物のモデルをスケッチさせるエピソードは、あくまで精力的なディケンズと、引きこもりがちなフィズの対照的な関係がうかがえてほほえましい(58-69)。当時の版画には真実を伝える媒体としての側面が強く、写真に代表される、版画よりも微細な表現が可能な技術が開発されるまでは、フィズはディケンズのいわば随行カメラマンの役割も果たしていたのである。

二人の共同作業は、『ハンフリー親方の時計』(『骨董屋』と『バーナビー・ラッジ』を含む)、『マーティン・チャズルウィット』、『ドンビー父子』、『デイヴィッド・カパーフィールド』と続いていくが、その一方で一躍売れっ子となったフィズにはチャールズ・リーバーを筆頭に、ディケンズ以外の小説家への作品提供、および『パンチ』への寄稿といった単独の仕事も舞い込むようになり、二人の蜜月時代は翳りを見せるようになる。次第に瓦解していく二人の関係を追った記述で印象的なのは、週刊誌『ハンフリー親方の時計』の編集に着手し、次第に交友の輪を広げていくディケンズの「コンダクター」(意識すれば「人たらし」)ぶりである。いわゆる芸術的な絵画をこよなく愛するディケンズは、その作風が徐々にシリアスなものへと移行していたこともあり(おそらく『ピクウィック』が依然として最高傑作だと見なされることへの苛立ちもあったはずだ)、フィズとその他

の画家を使い分けるようになる。フィズより 15歳年上の水彩画家ジョージ・キャタモールを口説く際には、フィズに人物の作画を担当させ、キャタモールには得意の建築物だけを担当させるといった分業システムを提案するといった厚遇ぶりだ（それでもしばしば締め切りに間に合わずに、フィズは度々尻ぬぐいをさせられた）。こうしたディケンズの甘えを許容するのも、常に楽観的なフィズの人徳というべきだが、その寡黙な職人かたぎの仕事ぶりが災いして、フィズの手になる挿絵が軽視されてしまうところに著者の苛立ちがあるようだ。ディケンズ作品のうち 10作品にフィズが挿絵を寄せているにもかかわらず、わずか一作品しか担当しなかったクルックシャンクの“Oliver’s asking for more”や“Fagin in the Condemned Cell”をつい思い浮かべてしまう我々もディケンズを責めることはできない。

やがて製版技術やリソグラフの進歩やラファエロ前派の出現によって、よりサイズの大きな、しかも精密な挿絵が可能になり、フィズの代名詞とも言える細部を書き込む従来の挿絵は時代遅れのものとして認識されるようになるのだが、そもそも挿絵というメディアに要求されるのは、写真の代替物としての写実性と、デフォルメによる芸術性という矛盾したものであり、その基準を同時に満たすのは容易なことではなかっただろう。フィズはdark plates (151-52)のような最新技術を駆使して、慣れ親しんだ風刺を捨て、より抽象的になるディケンズのテキストに対応しながら、『骨董屋』のネルやキルプ、『荒涼館』のジョーといった傑作を生み続けた。しばしばフィズの挿絵は単なるテキストの再現に過ぎないという批判がなされるが、テキストが「文学」として自律する過程においては、その再現にも非凡な技術と想像力が必要とされたことを見落としてはならない。

23年に及ぶ二人の関係が解消されたのは『二都物語』が完成した 1859年であるが、もはや修復不能なまでに乖離したテキストと挿絵の問題に加えて、著者はディケンズの離婚が二人の関係解消の原因だと見ている (166)。その不幸な生い立ちゆえに家庭を最優先するフィズは、『パンチ』編集長マーク・レモンらとともに、ディケンズの妻キャサリンを擁護する側にまわり、ディケンズと完全に袂を分かつことになる。長年にわたってディケンズの女房役を務めたフィズが、無意識のうちに自らをキャサリンに重ね合わせ、積年の不満を爆発させたのではないかと、というような邪推も可能で

あろう。ディケンズに「捨てられた」挿絵画家たちが残した挿絵 シーマーの“The Dying Clown”、クルックシャンクの“Fagin in the Condemned Cell”、そしてフィズの『二都物語』のタイトルページに、孤独にさいなまれる老人が描かれているという指摘は非常に興味深い。シーマーとの確執によって始まったディケンズとフィズのコラボレーションは、この奇妙な符号によって円環を閉じるのである。

1882年に67歳でこの世を去ったフィズの生涯は、挿絵という文化が成熟していく過程と重なり合い、その功績がなければディケンズ作品が当時あれほどまでに広く読まれることはなかっただろう。大江健三郎の『キルプの軍団』の中に、主人公のオーちゃんが「僕としては、ディケンズの本にある挿絵だけで一応話は了解できたと考え、父には話しませんでした」と言うくだりがある。時にはテキストを離れ、オーちゃん的読解を実践してみるのも、さまざまなメディアの融合体として成立していたヴィクトリア朝小説を理解する上で重要なことではないだろうか。

(島根大学助教授)

Leslie Mitchell, *Bulwer Lytton: The Rise and Fall of
a Victorian Man of Letters*

(Hambleton and London, 2003)

河 村 民 部

如何なる人の生涯でも、その生涯に纏わる驚くべき事柄の一つや二つはあるであろう。だがしかし、イギリス小説の研究家であればその名前くらいは聞いたことはあろうが、その小説は第一次大戦を境にして殆ど読まれることがなくなったブルワー・リットン(Bulwer Lytton, 1803-73)なる人物が一体何者で、どのような活躍をしたのかを知る人は、いまや殆どいないだろう。ましてやその生涯は驚くべき事柄に満ちていたということなど、誰

が知りえようか。

それを明らかにしようとして書かれたのが、レズリー・ミッチェル著『ブルワー・リットン あるヴィクトリア朝文人の盛衰史』である。本書は2003年出版であるが、それはリットンの生誕200年を記念して、これまであまりにも不当に無視され続けてきた偉大なるヴィクトリア朝作家を正当に評価しようとするための試みであることが著者によって語られている。

本書が明らかにする第一の驚くべきことは、リットンが「孤独」、「社会の除け者」というレッテルをその生涯背負って生きねばならなかったという事実である。生まれながらにしてリットンは、父親や母方の祖父母には完全にその存在を無視された。唯一の救いはリットンを溺愛してくれた母親がいたことであった。

子供時代の大半をリットンは母方の館ネブワース (Knebworth) で育てられ、やがて母の遺産として相続することになるこの館の祖父の書斎で読書三昧に耽ったが、このハーフォードシア州の館こそはリットンにとっての理想郷であり、彼がつねに回帰する貴族主義的口マン派的信念を形成したまさに源であったことは特筆に値する。家庭教師はつけられたが、定まった学校には行かず、行けばその頭抜けた才能からして競争相手はなく、むしろ虐めにあうことから大半が独学であった。イートン入学さえ自ら断ったほどである。

ケンブリッジに進んでもことは同じで、優れた才能にも拘らず、横柄さから、友人は殆どできず、彼の「孤独」を深めた。そうした彼の独学を養ったのはドイツ文学で、特にゲーテとシラーの作品がその基盤となった。リットンの小説には、「遍歴」と「修行」がそのテーマとなっているものが多いが、リットン自身も母国イギリス社会とはウマが合わず、むしろヨーロッパ大陸を点々と渡り歩くことになるのであるが、そのはしりがすでに若い頃の彼自身の遍歴修行に見られる。

この遍歴のときに出くわしてリットンの理想の女性像を決定付けたのが、湖水地方で出遭ったルーシー (Lucy) という乙女であるが、彼女は父親にべつのところに嫁がされ、間もなく死んだ。ウルスウォータの彼女の墓地を訪れたリットンは、泣き崩れて、ここで作家になる決意をしたと、のちに『自伝』で回想している。この川岸の乙女ルーシーは、特に *Alice*、*Ernest*

Maltravers、*Kenelm Chillingly*などリットン小説に繰り返し描かれる、保護を求める孤独な女のモデルとなる。このような理想の女性像は、その後のリットンの実人生では実現されることはない。

さて、第二の驚くべき事柄は、妻ロジーナ(Rosina)との結婚後の生涯にわたる凄まじい衝突と喧嘩である。どちらも孤児の境遇に惹かれて結婚するが、もともと家父長制を信条とするリットンと、女の自立を信条とする女権論者ロジーナとは、最初からうまく行くはずがない。それにリットンの母親によるロジーナへの軽蔑が生涯にわたって夫婦関係を悪化させた。リットンは他に女関係を次から次へと作り、終にはやがて遺言にもその名が登場することになるローラ・ディーコン(Laura Deacon)との間に娘を三人も拵えた。その他何々夫人、何々嬢との関係というのは山とあり、遺言にも十数名に及ぶ女の名が遺産相続人として登場するが、これはすべてリットンの忘れ形見だという。

ロジーナはロジーナで男を作り、二人の子どもロバート(Robert)とエミリー(Emily)を親友のミス・グリーン(Miss Greene)に預けてヨーロッパじゅうを転々とするという有様。リットンもロジーナも子どもを愛するということをしていない自己中心的な親の典型で、息子ロバートは、リットンの生涯の親友ジョン・フォスター(John Forster)に学校生活から私生活に到るまで面倒を見させている。エミリーは父を助けるようにと娘としての厳格な教育を父から受け、それに従ったが、早世した。

リットンとロジーナはまさに似た者同士で、己のことしか考えないエゴイストであるが、リットンは離婚を獲得するべくロジーナと男の後をつねにスパイを付けて監視し、脅しをかけた。ロジーナはこれに反抗して別居による生活費と子どもの養育費をふんだくろうと、裁判に訴え、リットンの向うを張って小説を書いては家庭の内情を暴露する暴挙に出、これを生涯続けたというから、いやはや、開いた口が塞がらない。そのためにリットン夫婦を巡って、文壇およびロンドン社交界がいずれの味方をするかをめぐって二派に分裂したという。とにかくロジーナの攻撃は凄まじく、リットンに政治家として成功を収める希望を断念させたほどである。

さて、肝腎の公的な人物としてのリットン像であるが、一つはいうまでもなく小説家リットンであり、もう一つは政治家リットンである。まず小

説家リットンは「ダンディ・ノヴェル」として知られる *Pelham*、*Falkland* そして *Devereaux* で衝撃的なデビューを果たした。処女作の *Pelham* はまさに「スキャンダルの一撃」であり、主人公のパイロンの不道徳が一大センセーションを巻き起こした。このほとぼりも冷め遣らぬうちに、さらに大きな衝撃が襲った。 *Paul Clifford* (1830) で、 *Eugene Aram*、 *Night and Morning*、 *Lucretia* とともに、のちにディケンズやハリソン・エインズワースが加わった、いわゆる「ニューゲート・ノヴェル」として知られることになる獄中の罪人を扱った小説群のはしりとなった。ダンディ小説および犯罪小説のいずれもが社会道徳規範への挑戦であり、このような人物たちを弁護することでリットンはいち早く名を挙げるようになったのである。

いったん名声を博すると、今度は偶像破壊者としてのリットンから当時の社会の要請する理想的な価値観を表明するお上品なリットンへと変貌することになる。時あたかも脅威を与える産業革命のさなか、村の生活、単純素朴な価値、そして家族の絆の大切さを謳い、 *The Caxtons* などは1849 - 1903年の間に16版を重ねるほどで、時代の宗教冊子 (tracts) として歓迎された。また続いて *Harold*、 *The Last of the Barons*、 *Rienzi* など、リットンの愛したサー・ウォルター・スコット流の中世趣味の小説や *King Arthur* などの叙事詩により、無私で高貴な価値と社会の調和を保った理想的な過去へと読者を誘うことで、世知辛い世の中を生きる読者に慰めを与えた。

だがしかし特筆しておかねばならないのは、名声を博したとはいえ社会道徳に真っ向から反するような偶像破壊者や犯罪者を描くリットンには、批評家はこぞって批判の声をあげ、これを弾劾したことである。これが極めて繊細な感情の持主であるリットンのプライドを痛く傷つけた。そこからリットンとイギリス文壇との確執が生じ、これが生涯にわたってリットンを文壇の周縁部へと追いやっていく。

これに輪をかけたのが社交界で、リットンはディケンズやディズレイリーとともに、ロンドン社交界でも悪名高い方の一派をもって任じるレディ・ブレッシントン (Lady Marguerite Blessington) の主宰するゴア・ハウス (Gore House) の常連となって、主流を行くレディ・ホランド (Lady Holland) の主宰する社交界とは完全な二派を形成した。ゴア・ハウスにはアルフレッド・ドルセイ (Alfred d'Orsay) をはじめとするイギリスきってのダンディが勢ぞろ

いした。リットンのダンディ振りが異彩を放ったことはいうまでもない。

このリットンの異端ぶりが社交界でもリットンをその周縁部へと追いやってゆき、文壇とともにリットンのイギリス人嫌いを促進した。リットンは己の才能を正当に評価せず、芸術家を特殊な才能の持主として敬うことをしないイギリス批評家、および愚かな読者を猛烈に批判した。リットンが外国に目を向け、ドイツ、フランス、イタリアの文学や批評家を讃美するのはこれゆえである。この母国との確執は、不幸なことに生涯続いた。

さらにリットンの政治家としての、短くはあったが議会の一員としての像も加えられねばならない。元来公の場で演説することが不得意であったリットンは、知性と発想は優れてはいても、議会における演説の仕方のみならず、致命的な嘲笑を買い、ここ政治の世界でも一流になることは、ほんのひと時を除いてはなかった。それは1832年の選挙法改正運動にラディカルとして力を発揮したときと、後年ダービー内閣で植民地大臣としてインドの直接統治の進言、オーストラリア、カナダにおける植民地の独立支援などを積極的に推し進め、大いに力を発揮したときであった。

もともと保守派の貴族的性質が基盤のリットンであるから、1867年の第二次選挙法改正による参政権拡大には賛成できなかったし、その前の1846年の穀物条例廃止においてもネブワースを基盤とする農業保護の貴族主義こそが、イギリス社会の伝統的な特質であることを強調し、フランスやアメリカ流の民主主義への移行に警鐘を鳴らした。このこともリットンが時代遅れとして政治の世界からも置き去りにされていく要因の一つとなった。

政治家としての公職を退いたリットンは、ふたたび芸術の世界に立ち戻ると、自国の未来像に不安を抱き、平等を主張する民主主義がやがて崩壊していくことを小説に描き、民主主義を超えた理想的な地下世界の誕生をさえ描いた小説*The Coming Race*を出版した。このように現実とは異なった架空の世界への関心は、元もとリットンにはあったのであり、霊的存在への関心を描いた小説*The Haunted and the Haunters*や*Zanoni*、*The Strange Story*などもリットン小説のもう一つの特徴をなすジャンルである。こうした形而上的世界への関心も、リットンを奇人変人として現実の社会から追放する言いがかりを提供した。

本書は、まさにヴィクトリア朝ならではの、このような驚くべき生涯を

映したリットンの小説が読むに値しないのかどうか再考を促す、緻密な資料に基づく良質の評伝である。

(近畿大学教授)

Slinn E. Warwick, *Victorian Poetry as Cultural Critique:
The Politics of Performative Language*

(University of Virginia Press, 2003)

山崎 弘行

周知のように、詩は、新しく登場した批評理論の有効性を検証するための試金石として用いられてきた。例えば、イエイツの詩「学童たちの間で」は、新批評家たちに曖昧さの事例を提供し、脱構築批評家たちに決定不能性の問題圏の事例を提供した。詩は、長年にわたり様々な分野の理論家や研究者たちの関心の中心を占めていたのである。ところが、1990年代以降、欧米の学界では、文化研究が影響力を増し、文学批評を文化批評に向かって推し進める傾向が強くなった結果として、詩が周辺的なジャンルに追いやられ始めたのである。本書の著者によれば、新批評の「作者の意図を読む誤り」のドグマに基づく言語芸術作品としての詩という文学理論と、脱構築批評の「テキストには外部はない」という過激なフォーマリズムの影響があまりにも圧倒的であったことが、その主要な原因であるという。多くの関係者たちに詩のテキストと社会文化的なコンテキストとの断絶性を強く印象づけてしまったのである。本書は、このような現状を打破するために、詩が社会と連続していることを理論と実践の両面から論証することを目指している。

理論として筆者が援用したのは「遂行的発話性」(performativity)という概念である。周知のように、これは、もともと英国の日常言語学派を代表するオースティン(J.L.Austin)が導入した作業仮説である。現在では、発話行為理論、言語学、ポスト構造主義、修辭学的批評、人類学、ジェンダー批

評、演技研究などの分野の研究者たちが各人各様に修正しながら援用しているテキスト分析の理論である。オースティンによれば、“There’s a bull behind you.”という発話文には、2つのレベルの意味が分かち難く同時に共存している。一つは「あなたの背後には一頭の雄牛がいる」という「事実確認文」(constative)としての意味である。もう一つは、「危険だから逃げなさい」という「遂行的発話文」(performative)としての意味であり、聞き手の危険回避行動を促さずにはおかない間接的な意味である。著者は、このオースティンの理論を援用することで、詩と社会との連続性を実証し、ひいては詩を文化研究のための中心的な資料の一つとして復権させることを構想しているのである。それにしても、文の中に「事実確認文」と「遂行的発話文」とが不可分の形で同時に存在するという原理が、どうして復権の理論的根拠になりえるのであろうか。著者によれば、ある特定の理論が詩を対象とした文化研究を支える理論になりえるための条件は、その理論が、詩のテキストの外に存在する社会を支配する文化的価値に「注目する」(mark)こと、それを「暴露する」(expose)こと、「批判する」(criticize)こと、あるいは同じことだが「疑う」(question)ことという最近の文化研究の目的になかった理論でなければならない。さらには、詩と社会との間の不可分性を大前提としていること、あるいは両者の対等性を前提として、いずれか一方を特権化しないことである。要するに、社会がいつもすでに詩に組み込まれた「構成要素である」(constitutive)ことを証明できる理論でなければならないのである。

著者が設定したこれらの厳格な条件に照らせば、既存の理論はすべて不適格である。例えば、伝統的な現実模写論(ミメシス)は社会への批判性を欠如した反映論に基づいており不適格である。グリーン・ブラットに代表される新歴史主義も、社会よりも文学テキストの記号構造に重点を置きすぎており不適格である。また、文学テキストよりも社会文化的コンテキストの方を特権化する傾向のあるレイモンド・ウィリアムズの理論の影響化で行われている一連の文化研究も、文学の社会からの断絶性を前提とするルイ・モンローズやアドルノの社会哲学もこの条件を満たしていない。その点、「遂行的発話性」理論は、これらの条件を比較的十分に満たした理想に近い理論モデルである。先ほどの“‘There’s a bull behind you.’”というテ

クストに則して著者の主張を検証してみよう。まず、「あなたの背後には一頭の雄牛がいる」を意味する事実確認文は社会的コンテクストに注目し、それを暴露する機能を果たしている。これに対して、「危険だから逃げなさい」を意味する遂行的発話文は、このコンテクストを疑い批評する機能を演じている。さらには、聞き手がこの警告を受け入れて実際に逃げた場合は、このテキストが聞き手の現実認識と社会的なコンテクストを変革する機能を果たしていることになる。以上のように、このテキストには、社会的コンテクストが不可分の形で組み込まれているばかりではない、そこでは、社会的なコンテクストに注目し、それを暴露すると同時に批判する機能が演じられているのである。本書の第2章から第6章までの各章は、ヴィクトリア朝時代というコンテクストで生じた主要な文化問題がどのように詩のテキストの中で注目され、暴露され、批判されているかを遂行的発話性の観点から分析した論考である。以下、各章ごとに、典型的な分析例を紹介してみよう。

まず最初に、第2章では、著者はRobert Browningの“*The Tomb at Saint Praxed's*” (1845)という劇的独白詩に用いられている主教の典礼文のもつ遂行的発話性に注目し、カトリック的家父長性社会のイデオロギー的文化構造が暴かれて批判されていることを論証している。第3章では、Barrett Browningの劇的独白詩“*The Runaway Slave at Pilgrim's Point*”における遂行的発話性が分析されている。次の一節の難解な文体は、本書の各章で著者が駆使する遂行的発話分析の文体の典型的なものである。

従って、この詩が文化批判を手段として達成しているのは、家父長が優越するという家父長制社会独特の価値と財産所有という資本主義的な価値とが結びつき、[白人の主人と黒人奴隷]との間のメロドラマ的な不和という文化を創出する方法を暴露することである。(83)

第4章において著者はArthur Hugh Cloughの*Dipsychus*をバッカスの祝祭詩として位置づけ、遂行的発話性理論にとって格好の詩として読むことを試みている。バッカスの祝祭詩の特徴として著書が指摘するのは、相互浸透的な対話、文化の変容と混交、対立葛藤の場としての詩、および主体性の

解体である。観念論対唯物論というヴィクトリア朝時代を支配した二元論的文化論の欠点を暴露し、批判するうえでこのような特徴を兼ね備えたこの詩ほどふさわしいものはないことが見事に論証されている。第5章では、D.G.Rossettiの独白詩“Jenny”が分析されている。この詩は、語り手の若者の娼婦Jennyに対する視線の性格をめぐって活発な議論が行われてきたテキストである。著者は、遂行的発話性理論の観点からこの問題に対して解答を与えている。自由主義的な若者の語りは、一方で、その無意識の男性中心的女性観が「文化的な策略」(cultural artifice)でなく「自然である」(natural)という印象を与えることでイデオロギーの役目を果たしている。しかし、他方で、そのような女性観を表象することを通して、この詩はヴィクトリア朝時代を支配した男性中心的文化システム自体を暴露し批判する機能を果たしているのである。最終章では、Augusta Websterの詩“A Castaway”と“The Happiest Girl”の語り手の独白が分析されている。社会に見捨てられた娼婦と最も幸せな許嫁という対照的な女性の語りが、共通に、ヴィクトリア時代の中産階級を支配する「世界で最も幸せな女性の文化的定義」を暴露し、批判する機能を果たしているのである。

遂行的発話性理論はいくつかの難問を抱えている。例えば、かならずしもすべての詩で特定の時代と地域の文化が批判されるとは限らない、時には文化が是認される場合もある。また、それぞれの詩のテキストが文化問題を変革したり解決する有様を分析することが出来ない。詩の中で文化を暴露し批判するのは詩人が意図した行為なのか、それとも読者の意図した行為なのかという問題もある。著者はこれらの難問を自覚するだけに留まらず、敢えてそれらに一つ一つ答える努力をも惜しんでいない。その意味で、著者は理論家として類例がないほど誠実である。第4章以外の章はすべて独白形式の詩を分析の対象としているが、このことは、詩を異質な文化的他者との対話に欠けた独白のジャンルだと主張したバフチンの理論に対する挑戦の姿勢のあらわれであろう。その意味で、著者は理論家として極めて野心的でもある。ひとつだけないものねだりをすれば、E. W. SaidとRaymond Williamsに代表されるsubjectの皮肉な二重性に基づく文化理論に対する筆者の見解が示されていないのは解せない。現在、幅広く流通している文化理論であるだけに惜まれる。著者は文化研究における詩の復権

をめざす徹底的に醒めた理論家である。自分の理論の限界を自覚しながらも、その可能性の中心を模索しようとする著者の意欲的な姿勢には、心底勇気づけられたのである。

(大阪市立大学教授)

井野瀬久美恵 『植民地経験のゆくえ アリス・グリーン
のサロンと世紀転換期の大英帝国 』

(人文書院 2004年)

見 市 雅 俊

扱われる時代は、19世紀末から20世紀初頭、帝国主義の華やかなりし時代である。イングランドとアイルランド、それにアフリカが舞台となる。

主役は2人いる。ひとり、19世紀末の高名な歴史家、J.R.グリーンの未亡人、アリス。グリーンの『イングランド国民小史』が当時たいへんよく読まれたことは周知のとおりである。そのグリーンは結婚して僅か数年後の1883年に夭折、アリスは35歳の若さで未亡人になってしまった。しかし、『小史』の印税収入のおかげで安定した生活が保証され、アスキスら自由党の国会議員をふくむ知的エリートの優雅なサロンをロンドンで主催するいっぽう、『小史』の改訂につとめ、さらに自分でもイングランド史の書物を2冊、ものにした。

それから、単著刊行にかんしては10年あまりの「空白期間」があり、そして1908年、『アイルランドの形成と解体』が出版され、さらに2冊のアイルランド史関係の書物が刊行される。本書の焦点は、この研究テーマの変更に絞られる。なぜ、アリス・グリーンはイングランド史からアイルランド史に鞍替えしたのだろうか。

簡単に解けそうな謎にもみえる。まず、この時期、アイルランド・ナショナリズムの興隆があった。アリスの著作もアイルランド史の独自性を高らかに謳いあげることによって、ナショナリストの間では高く評価され、

他方、イングランドのみならずアイルランドの「アカデミズム」からも「禁書」的な扱いを受けた。そもそも、アリス自身が「アングロ・アイリッシュ」の名門の出身であった。それに加えて、アリスのサロンの常連のなかにアイルランド・ナショナリストのジョン・フランシス・テイラがおり、その「熱烈なラヴレター」の存在（内容は「原則非公開」とのこと）を根拠に、彼にたいする「個人的感情」も絡んでいたことが示唆される。

この島国に視線がとらわれている限り、以上のような説明でもじゅうぶんに納得がゆくし、実際、イギリス本国でのアリス理解もこのレベルに留まっているという。しかし、井野瀬氏によれば、そのような一国史観から身を離れたとき、このテーマの変更には、もっと壮大なドラマが秘められていたことがみえてくる。それは、アリス・グリーンのアフリカ体験である。そして、アリスとアフリカとを結びつけたのが、本書のもうひとりの主人公（あるいは準主役）メアリ・キングズリであった。

その名前は、この時代にイギリスが世界に輸出する「レディー・トラヴェラーズ」軍団のひとりとしてよく知られている。「知的貴族の名門」、キングズリ家の出身。1892年、両親が相次いで死去、その心の痛手を癒すべくメアリは西アフリカ旅行を決意した。その旅行は2度にわたる。最初は下見程度。本格的な冒険旅行となるのは第2回目で、1894年末からおよそ1年間にもおよんだ。そのときの体験は『西アフリカの旅』（1897年）としてまとめられて大きな反響をよび、メアリは一躍、時の人となり、それが機縁でアリスのサロンに加わることもなった。

このメアリの旅行については、本書の第3章で詳しく内容が紹介されている。井野瀬氏の筆力もあろうが、たいへんおもしろく読める。押さえどころは、4点。まず、商売をしながらの自弁旅行だったこと。他のレディー・トラヴェラーズにはみられないことであり、メアリが対象の社会に肉薄できた理由のひとつになる。つぎに、淡水魚の収集。これは彼女たちに共通してみられる知的活動で、メアリは新種を発見する。そして、「白人未踏」の内陸部を5日間、冒険したこと。有名な「ロング・スカート事件」はこのときのものである。落とし穴に誤って転落し、底から突き出た黒檀の杭であわやというところを、熱帯の地にまで持ち込まれた、ヴィクトリア朝女性のあの暑苦しいスカートのおかげで助かったという事件で、帰国後の

講演会での格好の「ネタ」となる。最後に、もっとも重要なポイントとして、「人喰い」人種、「ファン」との出会い。メアリは、キリスト教・西洋化された「似非アフリカ人」とは違う、「本物」のアフリカ人を彼らのなかにみようと、西洋側が一樣に眉をひそめる「フェティシュ」をはじめとするファンの文化、さらに奴隷制度や一夫多妻制度も現地の「コンテキストでは必要な」ものとして認めようとする。メアリは、こうした「純粋な黒人」を庇護することこそ帝国の責務とした。「慈悲深き母」(アリスのメアリ評)のように、あるいは今日流に言えば多文化主義の立場からアフリカ人を温かく見守ろう、としたのである。

ここまでならば、メアリ・キングズリはまだレディー・トラヴェラーズの範疇におさまったはずである。アフリカ冒険のネタで気楽に暮らしてもいけたであろう。それが1900年3月、ボーア戦争が進行中の南アフリカに赴き、捕虜収容所で看護婦として働き、5月、腸チフスに感染して死んでしまうのである。享年、わずか38歳。このような「死に急ぐ」生きざまは、当時からエキセントリックなものとみられていたらしい。本書で紹介されているメアリ本人の発言やアリスのメアリ評からことばを借用すれば、名家出身の「時代遅れの帝国主義者」の「騎士道」精神の発露となるのか。上流人ゆえの下々にたいする同情ということだ。ファンに対する思い入れ、さらに似非アフリカ人に対する嫌悪感もそれによって説明できそうだが、本書ではアリス・グリーンについての緻密な分析に比べて、メアリ・キングズリについては、たしかに準主役とはいえ、分析が若干、弱いように思われた。

アリス・グリーンはメアリ・キングズリの衣鉢をしっかりと受け継ぐ。まず、サロンの延長線上で、メアリを記念する「アフリカ協会」の設立。組織そのものは今日も名称を変えて存続しているが、性格が変わり、設立当時のこともよく記憶されていないことが第4章で紹介されているが、全体の構成からみて、この章は必要だったのかという疑問がないわけではない。

もっとも重要なのは、アリス自身がわざわざ南アフリカに乗り込んだことである(第5章)。セント・ヘレナ島にもうけられたボーア人捕虜収容所を訪れ、そこで捕虜からの「聞き取り調査」をおこない、「ボーア人」とは何者であるかを確認する作業に取り組んだのである。たんなるセンチメンタル・ジャーニーではなかったのだ。その作業をつうじて、アリスは、「ボー

ア人」という「国民」がはなから確固として存在したわけではなく、むしろ反英戦争を戦うことによって「『ボーア人』というアイデンティティ」が芽生えてきたことに気づいた。そこから、アリスにとってアイルランドへの道筋が切り開かれた。井野瀬氏はそうみる。その証拠が、このときのアリスの日記の次の一行である。「南アフリカはアイルランドと同じである。」井野瀬氏はこうたたみかける。「ボーア人捕虜への聞き取りというフィールドワークは、アリス・グリーンにとって、彼女自身のアイデンティティとナショナリティを問い直す作業として機能したのである。それは、彼女が自身の国民としての帰属意識 アイリッシュ・ナショナリティを模索し、内面化していくプロセスであった。」

こうして、アリスのテーマ変更の謎が解けた。それをうけて第6章では、アリスによるアイルランド史の書き換えの試みが詳しく紹介される。メアリ・キングズリのアフリカの視座の継承ということが強調される。メアリが多文化主義的に展開した、「西洋＝文明＝物質的」に対峙される「アフリカ＝文化＝精神的」という枠組みが、アリスのアイルランド史では、「イングランド＝文明＝物質的」対「アイルランド＝文化＝精神的」というかたちで受け継がれ、また、メアリが西アフリカの伝統的部族制度をあえて擁護したように、アリスもアイルランドの中世的部族制度をそのナショナリティを体現するものとして積極的に評価したのであった。無味乾燥で平板なものになりがちな箇所だが、このアフリカというベクトルのおかげでまことにスリリングな展開となっている。

そして「結びにかえて」では、物語はまだ終わっておらず、さらにドラマチックな展開が待ちうけていることが予告される。すなわち、1910年代になるとアリスのサロンはアイルランド・ナショナリストの結節点のひとつとなり、しかもメアリ・キングズリの男性版である、かのロジャー・ケイメントがサロンの一員として登場するのである。アリスの身にいったいなにが起きたのであろうか。続編を乞うご期待という、まことに心憎いかたちで本書はおわる。

これまでに書かれた諸論文をベースにしている。大幅な加筆修正作業をおこない、書き下ろしのかたちに近づけようと努力したようだが、相互の内容調整がなお不十分だったとの印象はこのころ。井野瀬氏は、現在の日本

の西洋史学界における数少ない「ストーリー・テラー」のひとりである。ならば、物語のスムーズな流れが人一倍、要求されるのではなからうか。

イギリス本家の史学界の王道である伝記の手法が貫かれているが、本場の人間にはけっして書けそうにない、そして（おそらく）日本人にしか構想できない、上質の伝記ものに仕上がっていることを最後に強調しておきたい。

（中央大学教授）

岩田託子・川端有子『英国レディになる方法』

（河出書房新社、2004年）

太田良子

『英国レディになる方法』は、華やかだったイギリス・ヴィクトリア朝について誰もが知りたかった事柄を、豊富な図版と多くの文学作品からの的確な引用とともに、具体的に解説した、読んでも見ても楽しい1冊である。とはいえ本書で〈コスメティックス〉や〈ティー・タイム〉など、80余りの項目に整理された「物」や「事」は、ヴィクトリア朝だけに流行ったものではない。ヴィクトリア朝に栄華をきわめたイギリスは、その栄華の光と影の中であって今日を迎えている。著者が慎重に選んだ一つ一つの項目は、イギリス社会の過去と現在をあらためて伝えているといえる。

ところで私はイギリス滞在中に日曜日があると、朝の6時には起きて近所の雑貨屋に日曜新聞を買いに行く。売り切れるといけないからだ。高級紙4紙を全部買うので、相当な重さに耐える大きな袋を持っていく。そして4紙をゆっくりと見たり読んだりするうちに手が真っ黒になる至福の一時。とはいえものの、ここ4年ほどはイギリスにも行かず、もっぱら勤務先の大学が購入している『タイムズ』と『サンデー・タイムズ』を読むだけで我慢している。週日の『タイムズ』は昨年未から「タブロイド」版になってしまったが、日曜版は従来どおりの新聞サイズなのが嬉しい。

日本の新聞は休刊日が年に数回ある世界でも珍しい新聞で、そのほかにも経済情報、芸能、教育、就職、週間のテレビ番組などを、それぞれいちいち週刊誌にして別売するから、そんな週刊誌のゆうに5冊分はあるイギリスの日曜新聞のサービスぶり（一部200円前後）に拍手を送るファンは多いと思う。本紙のほか第9部まで付録をつける『サンデー・タイムズ』も、充実ぶりでひけは取らない。なかでも金融情報の「マネー」や不動産情報を満載した「ホーム」を見ると、『英国レディになる方法』の記載どおり、イギリス人がいまなお上等な住宅や家具やリスpekタビリティを求めて血眼になっていることがわかる。若いイギリス人の映画監督と結婚したマドンナは長女を私学の名門チェルトナム・レディーズ・カレッジに入れようとして失敗したようだし、ハリー・ポッターで大当たりしたJ.K.ローリングはお金に糸目をつけずにタウン・ハウスやマナー・ハウスや別荘を購入している（巨額の寄付もしている）。ミュージカルのヒット・メーカーで大富豪となったアンドリュー・ロイド・ウェバーは、ラファエル前派の絵画をもっぱら収集しているようだ。

私は商社に勤めていた夫の転勤で、一歳だった長女を連れて渡英し、70年代に5年間ウィンブルドンで暮らした。会社や大使館関係の年間行事があり、チェルシーにオフィスがあった「日本婦人会」（書記をした）ではサザビーズに見学にいたり、フラワーショウを見たり、毎年秋にはバザーがあって、帰国する大使館関係の人からノリタケのティー・セットが出たりした。日曜日には英国国教の教会に通い、また毛糸刺繍（本書30頁参照）を習った先生は、Royal School of Needle Work からきたミス・ジョーンズだった。英語もミス・パーソンズの個人教授を受け、ウィンブルドン・コモンに近い彼女のフラットで4年間、上品な家具や調度品に囲まれて週に一度英語を習った。スピンスターだった彼女はパピヨン種の犬一頭が家族、シスピーが老衰死したあとにきた子犬はレベッカといった。アリスというのは彼女の小型車の名前だった。ミス・パーソンズは外国人に英語を教えるというボランティア登録をワンズワース教区に届けていて、住まいが近いというので私の先生に立候補して下さった方である。さらに「ボヴリル」（本書56頁）や「テディ・ベア」（本書98頁）が好きだった長女がナースリー・スクールや学校に通ったおかげで、お茶（本書44頁）やガイ・フォー

クス・デイ（本書 114頁）など、色々な人の自宅に何度も招かれ、返礼（本書42頁）として私も招いた。美しい部屋を見ると私たちは「ホテルみたい！」と言うけれど、彼らの住まいや家具や絨毯や絵画は、お金では買えない家族の歴史と伝統に包まれていて、ホテルの部屋とはどだい比較にならないと思った。

さて『サンデー・タイムズ』で忘れてならない付録が、もちろん「カルチャー」の後半にある「ブックス」である。これはその週の出版関係の情報を網羅し、話題作や問題作を論評する文芸欄は、オクスフォード大学教授のジョン・ケアリー級の学者が担当している必見ものである。くわえて、出版社のFaber との共催で年に一、二度掲載される Literary Quiz がまた必見である。その問題を見ると、『タイムズ』の読者つまりイギリス・インテリ層の文学の楽しみは、貧困問題とか深層心理とかいう抽象理論よりも、具体的な細部とシーンにあることがわかり、彼らが到達した「神は細部に宿る」の境地の高さに圧倒される。Which literary man bought his cat bivalves? In which ghostly book is an evil violin incinerated?など、全部で46問、私が解けたのは、Which masterful hero dresses himself up as a fortune-telling crone? だけ、惨敗だった。

さて『英国レディになる方法』の「はじめに」によれば、「ひとりの裕福な中流階級の女性・・・の人生を支えた『物』と『事』を項目ごとに記述した」とあり、続けて「文学研究者」である著者が「本を読む中で感じた数々の疑問を解くこと」が執筆の動機だったとあるように、本書にいわばヒロインを想定して編集したことが発想の勝利だったと思う。ヴィクトリア朝は社会の繁栄と個人の虚栄が錯綜し、「誇示的消費」に人々が奔走した時代とあって、毎日が「物量の饗宴」に明け暮れており、幼い少女も例外ではなかった。つまり物と事を語ることがヒロインを語ることにほかならず、本書の「少女時代」に始まる彼女の人生は、最後の「未亡人」にいたるまで、まさにこれら80余りの細部に彩られると同時に、これらに縛られていた人生だったことがわかる。

著者の長い読書歴を反映して、本書のヒロインはオースティンやジョージ・エリオットといった著名なイギリス文学者の血を引く一方、時空を超えて、『若草物語』や『赤毛のアン』とも濃いつながりがある。だから本書

の「少女時代」が＜少女の下着＞や＜生理用品＞と続くのを見てわかるとおり、『不思議の国のアリス』はいうまでもなく、『高慢と偏見』や『ミドルマーチ』が行間に伏せたことが、各種の資料に基づいて例証されている。だが著者は＜少女の下着＞の項で、イギリスで出た少女下着の広告とか、下着問答が載っているイギリスの少女雑誌などに言及したあと、『大草原の小さな家』など、もっぱらアメリカの少女小説にある少女と下着の場面を引きつつ、イギリスの少女小説には、「コルセットの悩みも憧れも見受けられない」としている。長年エリザベス・ボウエンを読み、彼女の小説に出てくる戦時下の女学校と少女が秘めているテーマに関心がある私には唆暖に富む指摘であり、そのとおりだと思う。

そういえば『高慢と偏見』(1813)のミスタ・ダーシーが、朝の野原を3マイル歩いて紅潮したエリザベスの頬の色を世界で一番美しいと思ったのは、不自然な化粧の流行(本書9頁など)を暗に戒めたのかもかもしれない。白い頬が運動や感動でピンク色に染まる時ほど美しいものはないと、オースティンはその後も何度も繰り返している。オースティンから100年余りを経た1923年に最初の短編集を出したボウエンは、少女を書かせたら右に出る作家はないが、やはり下着には関心のない「身体性を欠く」少女しか出てこない。しかもボウエンは、少女時代は長いほうがいいという一貫した考えで少女を描いている。

少女時代はとくにヴィクトリア朝では区切るのが難しい概念で、本書でも「いつ髪を上げるのか、いつ長いドレスを着るようになるのか」(ボウエンの短篇「幸せな秋の野原」にも同様の場面がある。拙訳『幸せな秋の野原』に収録)として、少女時代の区切りを取り上げ、初潮年齢の低年齢化と女性の晩婚化という両面から、「茫とした『少女時代』が広がった」としている。また＜ロマンス小説＞の項には、ロマンス小説の読みすぎが少女の身体に不自然な結果をもたらすという風潮があったヴィクトリア朝は、「なるべく長いあいだ少女でいたほうがいい」とされた時代だったとしている。ヴィクトリア朝が少女時代の区切りを長くしたのは、当時のダブル・スタンダードにも関係があるのだろう。

さてヒロインが結婚して「奥様稼業」を始める家庭には、＜祈禱書と家庭用聖書＞がかならずあった。ことに「大きな聖書」と呼ばれる「家庭用

聖書」について、本書は的確な解説をしている。本書 50頁の図版がその Family Bible で、この大型の聖書が「家庭用聖書」または「家族の聖書」と呼ばれるのは、イギリスの冠婚葬祭と家庭行事がすべて聖書の教えにしたがって執り行なわれるからである。だからこの聖書は、「家族の誕生日や洗礼式の日付、結婚記念日、命日など」が書き込まれた、まさしく「一家の記録」なのである。しかしもし「家庭用聖書」の持つ意味を知らなければ、たとえばポウエンの短篇「針箱」(拙訳『あの薔薇を見てよ』に収録)の大胆な仕掛けを楽しむことはできない。本篇のヒロイン、ミス・フォックスは熟練の裁縫師で、「『マンスフィールド・パーク』をまねた失敗作」のような屋敷に一週間雇われて、令嬢たちのドレスを仕立て、家具の張り替えをする。裁縫道具が入った彼女の針箱は「家庭用聖書」くらい大きかったが、じつはこの針箱の蓋の裏にはこの屋敷の長男アーサーに瓜二つの少年の写真が貼られていた。ミス・フォックスの針箱は、だてに家庭用聖書のように大きかったのではない。それはまさに「一家の記録(秘密)」だったのだ。ポウエンが針箱に時代の変動を代弁させたように、小説の細部に宿る神はいつも、もの言わぬ小道具にひそんでいる。『英国レディになる方法』について何が伝えられたか不安だが、せめて<ゆり木馬>についてあと一言、しかし紙数が尽きた。イギリス・ファンであれ、小説の愛読者であれ、文学や歴史の専門家であれ、気軽に手にとって印象を確かめ、触発され、発見し、思索の整理に役立てられる本書はたいへん貴重である。

(東洋英和女学院大学教授)

荻野昌利『歴史を 読む - ヴィクトリア朝の思想と文化 - 』
(英宝社、2005年)

松本 啓

本書は、その副題が示しているように、ヴィクトリア朝の思想と文化を扱ったものである。しかし、これは決してありきたりの研究書ではなく、日本の現状に対する著者の強い危機意識に触発されたものである。一言でいえば、それは、物質的科学文明が人間の尊厳を圧殺しようとしている、というものである。著者は、「第一講はじめに」で、オールダス・ハックスリーの『素晴らしき新世界』を例にとり、「物質的科学文明への全幅の帰依が歴史的存在としての人間性を抹殺し、人間精神そのものを破壊する恐るべき可能性を秘めている」と説く。話は、わが国の科学万能の傾向と、それを反映しての実学の尊重と文学部の衰退に及ぶ。そして、現代に生きる者として知恵を発見するために、ヴィクトリア朝のイギリスの歴史を 読む ことによって、「日本の現状を把握し、反省する」ことを提言している。

「第二講ヴィクトリア朝はこうして始まった」は、産業革命をきっかけとして、1830-40年を境目として、イギリスは物質的繁栄を謳歌した一方で、スラム街の出現や政治的不平等といった諸問題が顕在化したことが語られている。この「第二講」は、ヴィクトリア朝の社会的・政治的背景を述べたものであり、これに続く八人のヴィクトリア朝人の分析の前置きである。しかし、これは単なるヴィクトリア朝の歴史の要約ではない。著者は、八名のヴィクトリア朝人の行動を語るに際して、彼らの行動の根源にまで立ち入って、「その行動につながるより総括的な心理的、精神的背景」を探ってこそ、初めてヴィクトリア朝の作家たちから学ぶべきものを発見できるのだ、と断定している。そして、これこそは、ヴィクトリア朝の『歴史を 読む』という表題にこめられたメッセージであろう。

これに続く、いわば本論の「第三講」から「第十講」で取り上げられているのは、トマス・カーライル、ジョン・スチュアート・ミル、チャールズ・ディケンズ、ジョン・ヘンリー・ニューマン、マシュー・アーノルド、

ジョージ・エリオット、チャールズ・ダーウィン、ジョン・ラスキンの八名の人物である。評論家あり、思想家あり、文学者あり、宗教家あり、博物学者あり、と実に多彩な顔ぶれである。しかし、このリストには、今日わが国の論壇ではもとより、日本の英文学会でもあまり取り上げられることのない名前が含まれている。カーライルしかり、ニューマンしかり、ラスキンしかりであり、彼らは、いわば今日ではカビの生えた教養主義の代表者として、冷たくあしらわれているといっても過言ではあるまい。だが、アナクロニズムと嘲笑されかねない危険を冒しながら、著者があえてこれら不人気な作家たちを取り上げたのは、そこに「人間本来のあるべき姿」を発見するための絶好の教材を見出しようとする確信しているからなのである。

最初にカーライルが取り上げられているのは、産業革命の進展とともに加速した唯物主義の潮流に初めに敢然として立ちはだかったのはカーライルだったからである。「第三講トマス・カーライル」では、精神的なものと物質的なものの「正しい協調」を求めつつも、カーライルは「今日の人間は『見えざるもの』への信仰を失い、『見えるもの』だけしか信じようとしない」と時代を批判し、やがて『衣服の哲学』を経て、『現在と過去』の中世主義と『英雄崇拜論』における英雄待望論とにゆきつくまでが語られている。確かに、晩年のカーライルの思想は保守化し反動化したにもかかわらず、著者は、カーライルの言葉には「ひたすらイギリスの精神の退潮を憂う心情がこめられていて」、われわれは、物質的価値観のみが優先しがちな「日本の現状の改善のために、今なにが大切か」をカーライルから学ばなくてはならないという提言で、この講を結んでいる。

「第四講ジョン・スチュアート・ミル」では、ミル『自伝』の初期草稿に論及することによって、流布本では削除されていた、絶対的権威の父ジェイムズへの、宗教の裏に隠されていた、恐怖心と依存癖を明らかにし、ハリエット・テイラー夫人との大恋愛によって、ミルは再び依るべき権威を見出して、知と情のバランスを保つことになったことが指摘されている。

「第五講チャールズ・ディケンズ」では、ディケンズの作品のうち、もっとも社会的批判の要素の濃い問題作『ハード・タイムズ』を中心に据えている。主人公トマス・グラッドグランドが、自分の子供たちを徹底的に自らの奉じる功利主義的理念によって教育した結果、彼らが知に偏した、

感情の働きを知らない人間になり、悲劇的末路を迎えること。また、貪欲非情な産業家バウダビーの「たたき上げの成功者」という仮面が、彼の教育のため身を粉にして働いた母親を冷遇しているという事実の発覚によってはがされ、彼が街頭で急死すること。これら二点にディケンズの物質主義批判が典型的に示されているとして、著者はディケンズをカーライルの弟子と位置づけている。

「第六講ジョン・ヘンリー・ニューマン」では、わが国のようにキリスト教の基盤の弱い社会では、今ではほとんどかえりみられない宗教家ニューマンを取り上げて、宗教界の俗化によって危機感を抱いたニューマンが、国教会の正当性の問題を掘り下げてゆくうちに、ついにローマ・カトリシズムこそ唯一の宗教的権威であることを認めざるをえなくなり、オックスフォードから追放されるに至ったことが語られている。ニューマンの『時事小論集』、『わが生涯の弁明』、『大学の理念』についての解説は、わが国ではあまり取り上げられないものであるだけ、きわめて有益である。ニューマンはオックスフォードを追放されたのちも、母校のオックスフォードをモデルにして、リベラルな知識を体得した「紳士」の育成を目指したことが語られ、著者はニューマンのこの大学の理念をわが国の大学の現状と対比させつつ、「大学とは何ぞや」と読者に問いかけている。

「第七講マシュー・アーノルド」では、著者は「ドーヴァ海岸」や『エトナ山上のエンペドクリース』を例にとりつつ、若き日のアーノルドの精神的苦悩を扱ったうえで、彼が1857年にオックスフォードの詩学教授に任じられたのを契機にして評論の分野に転じ、自らの時代に精神的指針を与えようとして、批評的精神の喚起を促し、『教養と無秩序』において、教養を高め、無秩序（各自が好き勝手に振る舞うこと）に抗することの必要性を説くに至ったことが語られている。著者は、「教養の価値を再認識して、われわれの周囲から失われつつある」優雅さを取り戻すためには、アーノルドは「かけがえのない資料となる」という言葉でこの講を結んでいる。

「第八講ジョージ・エリオット」では、彼女が「福音主義キリスト教から始まって、懐疑を経由して・・・人間教に到達した」経緯を述べたのち、歴史小説『ロモラ』を中心にして、ヴィクトリア朝後期の文明を十五世紀末のフィレンツェの状況に重ね合わせることによって、エリオットが「愛

と 義務 の觀念の重要性を主張したことが述べられている。

「第九講チャールズ・ダーウィン」は、評者の能力を越える主題を扱っているので、論評は控えさせていただくことにする。

「第十講ジョン・ラスキン」では、ラスキンが『近代絵画論』によって絵画の内側に真なるものを「見る」べきことを提唱し、さらに建築論へ進出し、『ベニスの石』によって、ヴェネツィアの盛衰がその建築物に反映されていることを指摘したことが述べられている。ラスキンは、「道徳的芸術規範を理念的に大成した」のであり、ヴィクトリア朝の機械と物質への傾向を憂え、近代物質文明批判を展開した点で、著者はラスキンがカーライルの物質文明批判を受け継いでいるとしている。

以上のことから明らかなように、著者は本書で、「現代を考察するための一助となるような作家をピックアップして語っている」のである。彼らに共通する要素を示すために、著者は、カーライルが愛用した 社会 、 道徳 、 義務 という語に言及し、これらの觀念が以後のヴィクトリア朝作家に受け継がれていることを指摘しているのである。

さらに、本書の巻末には、「第十一講世紀末 ヴィクトリア朝の終焉」と「第十二講おわりに 往く人、来る人」の二講が置かれているが、紙幅の関係で、その内容を紹介することはできない。ただ、最終講で著者は夏目漱石の「自己本位」という言葉に言及している。著者の荻野氏も、本書によって氏なりの「自己本位」を貫こうとしているのであろうか。

総じて、狭い専門に閉じこもり研究のための研究でこと足れりとしているわが国の英文学研究者にとっては、この荻野氏の仕事は、きわめて刺激的なものである。著者が、広くて深い学識と鋭い分析力を駆使しつつ、独特な語り口で、思いのたけを語っているユニークなヴィクトリア朝論であり、一読に値する警世の書である。

(中央大学教授)

高橋哲雄 『スコットランド 歴史を歩く』
(岩波新書 2004年)

村岡健次

この2・30年のあいだに、イギリス近代史の見方には一つの大きな変化が生じた。今から2・30年前のわが国西洋史学界においては、BritainもEnglandも、ともにイギリスないし英国と表記され、イギリス史ないし英国史といえば、それはすぐれてイングランド史を意味し、あえて極言するなら、スコットランド史などという範疇は存在しなかつた。たとえばアダム・スミスは、出身がスコットランドであることはよく知られていたが、その前に彼は何よりも、ダーウィンやニュートンやシェクスピアと同様のイギリス人であつた。そしてこの事情は、どうやら日本だけの話ではなく、当のブリテンでも同じだったようで、本書評との関連でも注目したいイングランド人史家のリンダ・コリーは、1992年に「英語でも外国語でも依然としてグレート・ブリテンを イングランド と称する傾向が強い」(Linda Colley, *Britons: Forging the Nation 1707-1837*, 1992 [川北稔監訳 『イギリス国民の誕生』 名古屋大学出版会、2000年、137頁]) と述べていたし、またスコットランド人史家のロザリンド・ミチスンも、1990年代に「この100年近く、学校教育の場でブリテン史といえば、イングランドではイングランド史一辺倒であり、スコットランドでもイングランド史を指す」(Rosalind Mitchison, ed., *Why Scottish History Matters*, 1991, enlarged ed., 1997 [富田理恵・家入葉子訳 『スコットランド史 その意義と可能性』 未来社、1998年、12頁]) という趣旨の発言をしていた。だがこの状況は今では変化して、少なくとも歴史研究者のあいだでは、ブリテンにおいても日本においても、Britain, England, Scotlandは(それにWales, Irelandも) 概してそのままきちんと表記されなければならなくなっている。これを要するに、この2・30年間にイギリス連合王国を構成する諸国のあいだに、ナショナル・アイデンティティの意識、すなわち国民意識が非常に強まってきたからで、そのことは1999年のスコットランドとウェールズにおける国民議会の開設に端的に象徴されているといえる。そしてこの状況の変化を踏まえて、新

しいイギリス連合王国の歴史がつぎつぎに上梓されるようになった。上記コリーの書物は、1707年の英蘇合邦から1837年のヴィクトリア女王即位にかけて、Englishness+Scottishness=Britishnessという新しい国民が形成されたことを論証しようとしたものであり、またミチスン編の書物は、その原題『なぜスコットランド史は重要か』が示すように、スコットランドのナショナル・アイデンティティの自覚にもとづくスコットランド史家たちによるみずからの国民史概説の試み、であった。そしてそのスコットランドについて、いうなればコリー流のやり方を適用し、現代スコットランド国民意識の歴史的ルーツを尋ねることでその国民意識の特質を解明しようとしたのが、すなわち本書である、とあってよからう。

著者の高橋氏は、本書の意図をこう述べている。「この本のメイン・テーマは、この国の今日のアイデンティティのルーツである。ただ、それを古代・中世にまで遡らせては話が広がりすぎ、概説的になってしまう。そこで探索の時代的範囲を近世史に限定し、一六世紀中葉にカルヴィニズムを受け入れた宗教改革（1560年）に始まり、ほぼ一九世紀初めまでの二世紀半とした」（本書12-13頁）。氏には歴史紀行とでもいうべき著作がすでにあり、『アイルランド歴史紀行』（ちくまライブラリ、1991年）、『イギリス歴史の旅』（朝日選書、1996年）について本書が三冊目だが、いずれもその表題が示唆するとおり、現地を丹念に探訪し、そこから得られる生の知見を叙述に反映させるというやり方をとっている。そしてそのやり方は、本書においても、たしかにそれなりの成功を収めてはいる。だが概説でさえ一般にはろくに知られていないスコットランド国民史の特質を、たとえそこに起源があるとはいえ、近世史という同国屈指の波瀾万丈期に限定して叙述するということは、さすがの氏にもそう容易ではなかったようで、みずから「おわりに」で述懐されているように、本書は「スコットランド史を歩く」といいながら、そのじつ「スコットランド史を究める」体のもとなってしまった。が、とはいってもその内容は、氏の熟達したエッセイスト風の文体にも支えられ、刺激的で面白く、格好のスコットランド史入門となっている。

本書から浮かび上がってくるスコットランドの国民史的特質は、大きくいって三つある。一つは、スコットランドという国がどうしてもイングラ

ンドと一緒にしなければ生きられなかつた、そしてこれからも多分そうだろうという、小国としての運命である。一七世紀中葉までスコットランドは、ヨーロッパの大国フランスと適当に折り合いをつけ、宗教改革後は、1603年にスコットランド王がイングランド王を兼ねる同君連合が成立したこともあって、どうにか国家としての独立と体面を保つことができた。だが英蘭戦争終結と名誉革命を主要な契機に、一七世紀後半からイングランドの政治・経済発展がしだいに本格化すると、スコットランドにはそのイングランドに屈従し、大英帝国の発展に貢献する以外に生きる道がなくなった。ハイランドの抵抗（＝グレンコーの虐殺）もジャコバイトの反乱も、人びとの同情をひき、後代に淡い国民的記憶を残したとしても、最後は弾圧されるほかになく、起死回生を策したダリエン計画も水泡に帰した。こうしてスコットランドは、みずからの議会を奪われてまでも、本書の表現によるなら、合邦というイングランドとの「悲しい結婚式」を挙げなければならなかった。スコットランドのナショナル・アイデンティティといっても、それは所詮、先述のEnglishness+Scottishness=Britishnessという等式のなかのものでしかなかったのである。

次に残り二つのスコットランドの国民史的特質は、いずれもスコットランド・ナショナル・アイデンティティの構成要素にかかわる。その第一は、1560年にジョン・ノックスの宗教改革によって成立し、その後長老派教会として定着したカルヴィニズムで、それは二〇世紀初頭にいたるまでこの国の国教であった。プロテスタンティズムのなかでも、とりわけその教義が峻厳をきわめたカルヴィニズムが浸透したため、この国では、総じて消費・娯楽文化は育たず、美術・音楽もほとんど不毛に終わった。だがその代わりに、努力をいとわず、合理的思考と勤儉力行を旨とする精神風土が生まれ、一八世紀後半を中心に「スコットランド啓蒙」と通称される学術・文化運動が花開き、そこから比類ない筋金入りの実学・実業の知識階級が育った。「世界の工場」といわれ、世界経済の覇者となつた一九世紀大英帝国の発展は、縁の下で、少なからずこのスコットランドの実学・実業階級によって支えられていたのである。本書においてこの間の経緯の説明には、著者の経済・法学・工学技術・建築・医学等にわたる博識が動員されているが、考えてみれば氏は、もともとイギリス経済史の専門家なので

ある。だが一つ気になったのは、氏がカルヴィニズムの長老派を「聖書を絶対視する原理主義的宗派」と捉えている点で（本書29頁）、ここはマックス・ウェーバーが言及したように、やはり「予定と選び」の教説に注目する必要があるのではないだろうか。

最後に現代スコットランド・ナショナル・アイデンティティのもう一つの構成要素は、たとえばキルトとタータンに象徴されるケルト的な民族意識である。わたしたちはキルトもタータンも古くからのケルトの民族衣装と思いがちだが、本書によるならばそうではなく、それはじつは、一八世紀から一九世紀初めにかけて、スコットランド・ロマン主義の文芸運動が人為的に創り出した、いわゆる「創られた伝統」（史家ボズボームの言）にほかならなかった。合邦後この国がEnglishness+Scottishness=Britishnessの等式のなかで生きていくためには、文化先進地域のロウランドと後進地域のハイランドを統合する新しい「伝統的」国民意識の創出が不可欠だったのである。氏はこの間の経緯を、ジェームズ・マクファースンによる古代ケルトの「オシアン」詩の発見と、ジョージ四世のエディンバラ行幸（1822年）を機会にウォルター・スコットが企画したキルト着用の歓迎式典に焦点をあわせる形で説明しているが、それらを扱った第四章と第五章は、評者には本書の圧巻と思える。「オシアン」詩については、すでに当時からそれをマクファースン自身の創作（それゆえに偽作）とするジョンソン博士の辛辣な批評があり、今日においてもその評価の可能性が高い。またコリーによるなら、ジョージ四世にキルトを着用させたスコットの演出にも、それを不快視するロウランド有識者の厳しい批判があった。だが氏は、こういったことは承知のうえで、この二つの出来事を積極的にスコットランド国民史における「事件」として位置づけた。そこには氏の小国スコットランドにたいする暖かいまなざしがある、とあってよかるう。

（甲南大学名誉教授）

谷田博幸 『唯美主義とジャパニズム』

(名古屋大学出版会、2004年)

松村伸一

谷田博幸氏の『唯美主義とジャパニズム』は、氏が1985年から97年までに書き継いだヴィクトリア朝美術論を母体としつつ、要所に書下ろしの文章を添えて、唯美主義とジャパニズムをキーワードに再構成した一書である。その基調をなすテーマは、序章やあとがきに明晰に述べられている通り、フランス近代絵画史にしばしば見受けられるモダニズム史観とでも呼ぶべきものへの批判である。その批判を支えているのは、該博な知識と綿密な資料調査、そして何より、一九世紀イギリス絵画への愛であろう。

モダニズム史観とは、「新古典主義、ロマン主義、レアリスムを経て、印象派、後期印象派、新印象主義（点描派）、フォービスム、キュビスム」へとあたかも絵画表現が自動的に成長を遂げたかのように語る美術史観であり、また、この単線的な発展から洩れるあらゆる絵画表現の試みを anomaly と片付ける価値観でもある。それは「結局モダニズム絵画への寄与・貢献の多寡によって一九世紀美術を篩にかける過ち」を犯しているという谷田氏の指摘は正しい。なるほど美術史家ゴンブリッチの有名なテーゼのとおり、「絵画は絵画から生まれる」という一面もあるかもしれない。しかし同時に、政治経済の諸力も、芸術制作を取り巻く環境として、大いに関わりがあるはずだ。私が興味深く感じたのは、一九世紀後半に西欧が日本美術工芸を受容した背景には、ヨーロッパ諸国間の産業デザイン上のヘゲモニー競争があったという指摘である。他国より美しい製品を生産し、より多く販売することが国家的課題だった。英国人オールコックの日本芸術論が『日本の芸術と芸術産業』と題され、フランスのジャポニスム理論家エルネスト・シェノーに『美術の分野で競う諸国民』なる著作があるのは象徴的だ。開国を迫られた日本が欧米諸国の工業技術を輸入して富国強兵を図りつつあったまさにその時代に、欧米では日本の伝統工芸品に刺激を受けた工業デザインを産業振興に役立てようとしていたとは、面白いとも因果とも思われる平行関係である。

谷田氏の唯美主義・ジャパニズム研究の特質として、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティへの関心から出発している点を指摘して良いだろう。一般には、唯美主義といえばオスカー・ワイルド、ジャパニズムといえばホイットラー、ピアズリーと、ほぼ自動的に名前が思い浮かぶものと推測するが、本書では、ワイルドは諷刺画の対象としてわずかに登場するにとどまり、ピアズリーは一度名前が言及されるだけである。その理由は、本書の関心が1850年代後期から70年代にかけて、ジャパニズムが発生から興隆に向かい、唯美主義の蕾がほころび始める時期に、ロセッティが果たした貢献を検証することに、本書の主な関心があるからだ。『ドリアン・グレイの絵姿』の冒頭部「Tokioの画家たち」をめぐる一節で唯美主義と日本趣味の結びつきを強く印象付けられた読者は、少し淋しい思いをなさるかもしれないが、その時は類書を手に取れば良いだけのことである。

第一部「ジャパニズム」は、包括的な論述を期待する向きには、若干 patchy に見えるかもしれない。しかし、それは冒頭にも述べたモダニズム史観批判を踏まえた戦略と捉えるべきだろう。単線的な様式発達物語に陥ることなく、かといって微細な事実の集積へと歴史を雲散霧消させてしまうこともなく、同時代人々の関心に寄り添いつつ、過去の事象を意義付けるアプローチが求められている。第一章「ヴィクトリア朝英国に渡った日本の美術」では、そもそもどのような日本の美術工芸品がどのようにしてイギリスに紹介されたか、という基本的な事実が綿密にたどられている。また、第三章「古代ギリシャと日本」は、ヴィクトリア朝人が彼らにとっての「夢の国」である日本と古代ギリシャを類比的にとらえていたことを指摘し、一九世紀英国における日本趣味の感情的機能を肉付けしている。残りの章、すなわち、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティのブックデザインに日本趣味の影響を見る第二章「余白と非対称」と、谷田氏が独自に入手された書簡を手がかりに、幕末に国禁を犯して英国に渡った薩摩藩留学生らの消息をたどった第四章「ロセッティと薩摩藩留学生と」は、いずれも興味深い歴史の marginalia である。第五章「蒲原有明と日本におけるロセッティ崇拜」については、「英国ジャパニズム研究への傍証」と位置付けられてはいるものの、さすがにいささか収まりが悪い気もするが、その所論は *Journal of Pre-Raphaelite Studies* に発表された英語論文に基づいてお

り、ロセッティ詩の良き理解者として蒲原有明の名を世界に知らしめたことを功績として評価したい。

第二部「唯美主義」は、レイトン、アルマ=タデマ、アルバート・ムアといった唯美主義画家の魅力と重要性を語って余すところがない。三者とも古典古代の芸術に靈感源を求めた画家として知られるが、その求めるところがいかに違っていたかは本書を読んで合点がいった。ここに加えてグリムショー、ポインターや、ディ=モーガンら女性画家、さらにはウォーターハウス、ウォッツといった「最後のロマン派」画家らにもそれぞれ一章を割いた、魅惑的な後期ヴィクトリア朝絵画論をいつか日本語で読んでみたいと、つい夢想した。

谷田氏は、唯美主義的絵画の近代性を、純粋な装飾美の追及、およびそれと表裏一体をなす、主題の欠如に見ているようだ。このことの意味を考慮するには、英仏画壇を取り巻く環境の違いを思い起こしておくべきだろう。フランスの美術アカデミーが国家権力と深く結びついており、そこでは歴史画を頂点とする絵画ジャンルのヒエラルキーが確立していたのに対して、イギリスのロイヤル・アカデミーは政府から財政的にも全く独立した私的機関であり、主題のヒエラルキーもフランスほど強固ではなく、中産階級の趣味を反映した風俗画に人気が集まっていた。こうした事情から、ムアらの絵画において、古代ギリシャ世界が、神話伝説という意味を剥奪された純粋な意匠として機能するという、フランス的絵画観からすればまことに逆説的な現象も、生まれえたのである。

唯美主義とジャパニズムの共通点のひとつとして、『パンチ』に代表される諷刺メディアに素材を提供し続けたことを挙げる必要はあるだろう。第三部「唯美主義運動」をなす最終章には、ジョージ・デュ=モーリアの諷刺画文がふんだんに紹介されており、あたかも裏口から唯美主義の屋内をのぞきこんだかのような、実に楽しい読み物になっている。

ここまで機会を逸していたが、ジャパニズムという表記そのものにも触れておかねばなるまい。ジャポニスムという語は、従来あまりにもフランス中心主義的文脈で使われてきたし、英国における日本美術の影響を語るのに、フランス語を用いる必然性は全くないという谷田氏の主張に、首肯するヴィクトリア朝文化研究者は多いかもしれない。ただ、ひとつだけ気

になることとして、日本思想史の領域では、Japanismは右翼政治理論でいう「日本主義」の訳語として定着しているらしい。むろん文脈が全く異なるはずなので、頓着する必要はないとする立場もありうるが、いっそ一九世紀後期西欧における日本趣味のことは「ジャポニスム」(Japonisme)と表記することにしてしまうのも現実的妥協策かもしれない。

最後に、読み進めながらいくつか気になったことがあるので、心覚えに書きとめておきたい。外国人名の日本語表記は、つねに頭痛の種である。George du Maurierを「デュ=モーリエ」とするのは、孫娘である『レベッカ』の作家がすでにデュ=モーリアで定着していることを考えると疑問が残る。また、Bell-Villada, Prettejohn, Psomiadesはそれぞれ「ベル=ヴィアダ」「プリティジョン」「プソミアデス」という表記が流布しているのだろうか。唯美主義研究では必読書の著者の名であるだけに、広い合意を得た表記が望まれる。本書に関わる例で言えば『ユートピアン・クラフツマン』の著者が「ラバーン」、1987年に国立西洋美術館で開催された「イギリスのカリカチュア」展を統括したのが「ランボーン」では、はなはだ不便なのである。人名ではないが、「シェイクスピアソネット」(138頁)とあるのは、Shakespearean sonnetの転記としては一般的ではない。単なるtypoかもしれないし、英語論文を日本語に移す際に手違いがあったのかもしれない。

デュ=モーリア「社交界の詩」の引用(290頁)のうち、挿画下部に見える原文では"As a butterfly dost thou fluttah by; / How, whence, and oh! whither, art come and gone?"となっている箇所が「蝶の如く貴女はひらひらと舞いすぎていく。/ 芸術はどうして、どこから来て、/ ああ、どこへ行こうとするのか？」と訳されている。行が増えたことは脇へ置くとして、この"art"はthouに呼応したbe動詞の活用形で、過去分詞"come and gone"とともに完了形を作っているのではないだろうか。確かに、シンタクスの取りにくい一文ではあるが、文脈から考えても「芸術」と解釈するのは無理があるように思う。

とはいえ、上記の諸点はいずれもごくごく些細な瑕疵であり、主要な論点にはいささかも関わるものでないことは、急いで付け加えておかなければならない。本書は唯美主義とジャパニズムについて学ぶための最初の一冊ではないかもしれないが、フランス近代美術史家たちの著作になじんだ

読者にとっては、counterbalanceとして大いに資するところがあるだろう。とりわけ、テロリズムがロンドンにまで広がった今日、文明は衝突するのみではなく、たがいに消化し、昇華しあうものだという事例を掘り下げる知的営為には、従来に増して少なからぬ意味があることと考えたい。

(青山学院女子短期大学助教授)

富士川義之『新=東西文学論 - 批評と研究の狭間で』

(みすず書房、2003年)

荻野昌利

本書は『風景の詩学』(1983)や『ある唯美主義者の肖像 - ウォルター・ペイターの世界』(1992)など、これまで数多くの著作や翻訳書を精力的に発表してきた著者が、三十余年にわたっているいろいろな機会に発表してきた研究論文やエッセイなどを一堂に集めた、二段組346頁という量的にもかなり龐大なもので、いわば過去の業績の集大成である。そう言うと、世間によくあるような、これまでに雑然と書きためてきた論文を一冊にまとめた体裁の人生の総決算書か、自分史的な著述との誤解を招きそうであるが、最初に断っておくが、この本は決してそのような類のものではない。全体が第一部《英米の文学》と第二部《日本の文学》に大別され、それがさらに章に細分され整然と時代順に並べられている。個々の論の初出には時間的に相当の隔たりがあるにもかかわらず、富士川さんが本書の「あとがき」で語っているように、「研究か批評かという二者択一ではなく、研究寄りの批評、または批評よりの研究の姿勢、言いかえれば批評と研究の狭間で仕事をする姿勢」(p.343)という、いわば富士川流とでも言うべき方法論によって、まるで最初から計画されたように秩序たたく構築され、さらにそれがよどみのない安定したディスコースで貫かれているという点で、極めてメリハリの利いた総合的な近代文学論なのである。

第一部《英米の文学》は、イギリスの17世紀の文人トマス・ブラウンと

ロバート・バートンからローレンス・スターンに至る奇人エッセイストや小説家たちの奇矯な言行の系譜を扱った「英国の脱線文学」に始まって、『マティス・ストリーズ』（1993年）を中心としたA.S.バイアットの作品論（「絵画と小説 A.S.バイアット」）まで、文学に限らず絵画、音楽にまで話題を広げて、さまざまな角度からおよそ400年間にわたっての英米の美意識の変化の歴史を綴ったものである。そのなかには、たとえば「時間のなかの風景 プッサンからワーズワスへ」のように、すでに『風景の詩学』で取り上げられたテーマと同工異曲のものも含まれている。だが、私たちに関係の深いヴィクトリア朝に限ってみても、「阿片夢の風景 ド・クインシー小論」、「眼への偏執 ポー」、「マモンの神 ターナーとラスキン」、「ラスキンの恋」、「タンホイザー伝説 異端者の系譜」、「ワイルドの女性たち シビルからサロメへ」、「魂」の出番 アーサー・シモンズの現代性」など（それらのいくつかは、かつてどこか別の場所で読んだ記憶のあるものも含まれてはいるが）、まことに多種多彩である。そこに登場する作家たち、あるいは題名にこそ現れないものの、スインバーンのような詩人、バーン＝ジョーンズやピアズリーなどの画家たち、いずれを取っても一癖も二癖もありそうな個性派ばかりである。それに加えて、ボードレル（詩人）やルドン（画家）、ワグナー（音楽家）など、19世紀後半のヨーロッパ大陸の芸術運動の立役者たちが随所に織り込まれ、それぞれの話題に花を添えている。

このような富士川さんの関心の多面性は、第一部後半の20世紀の英米文学について語っている部分でも、基本的に変わることはない。D.H.ロレンスのエロティシズム、エズラ・パウンドの初期の詩、T.S.エリオットの『荒地』、ヘンリー・ミラーの『北回帰線』などの放浪の文学、アンジェラ・カーターの『血染めの部屋』など大人の童話、帰化人カズオ・イシグロの『日の名残り』に見出せる英国性、そしてA.S.バイアットの実験的小説『マティス・ストリーズ』と、一見すると雑文の寄せ集めのような雑多な話題が大雑把に時代順に並べられているように見える。しかし、先に取り上げた19世紀の作家たちの場合と同様に、そこに選び出されているのは、例外なく世間的に異色視され異端視されながらも、伝統に囚われず独自の美的世界を創出することに苦闘した作家たちであり、その具体的実践例で

ある。

こうしたルネサンスから現代まで、多彩な糸で紡がれた織物から、著者の意図した統一的デザインを探り出すためには、一つひとつの章を細かく吟味することではなく、全体を一連の流れのなかで改めて読み直してやる必要がある。上に並べた本書の章題からも明らかのように、そこに名を連ねた作家は、いずれも創造的な美の表現に並々ならぬ関心を寄せる人々である。本書の意図は、その具体的事例をあげつつ、歴史的展望のなかで捕捉しようとしたもので、その創造（想像）的文様をどのように描き出すか、それが富士川さんが今回の仕事で自らに課した課題だったと思う。かつて富士川さんは『ある唯美主義者の肖像』のなかでペイターの美的世界を鮮やかに浮彫りにして見せた。本書を読むと、富士川さんの長年にわたってのこのような強い審美的関心が発想の前提になり、ここに採択されている論文がいわば下絵の役割を果たして、初めてペイターという一人の傑出した唯美主義者の見事な肖像画の描出が可能になったということがよくわかるのである。

第二部《日本の文学》は、明治以降日本の文学者がいかにして海外文学を取り込み、そこから独自の美的世界を構築していったか、明治初期の翻訳文学に始まって現代に至るまでを、第一部と同様な手法で語ったものである。なかには夏目漱石のような大作家も含まれているが、内田百閒、中島敦、吉田健一、篠田一士、そして澁澤龍彦といった、そのほとんどが日本文学の主流とは多少とも隔たった立場を固持していた作家や評論家が対象となっている。そういった作家・評論家の異色の作品を主献立している点、テーマ的には第一部の流れに乗ったもので、いわばその焼き写しと言ってよいだろう。

しかし、富士川さんの文学観がもっとも明確な形で発露されているのは、実はこの第二部ではないだろうか。行間至るところから著者自身の素顔を顔をのぞかせていて、ある意味では精神的自叙伝としても読める部分である。個人的好みをこめてあえて言わせていただければ、私としては、この第二部がもっとも興味深く読めた部分であった。とりわけ「明るい憂い」に始まる一連の吉田健一を扱った4章と「アナロジイの精神」以下5章にわたっての澁澤龍彦論は、富士川さんの文学的関心の出自を知るうえで極め

て貴重なものである。たとえば「吉田氏の本との出会い」と題した章。吉田の『英国の文学』を若いころ読んで、彼の「事柄を理屈によってではなく、まず感覚によってはっきりと掴みとっていることがまざまざと感ぜられ」（280頁）、その「自然と人間の合作」を志向するイギリス人的な自然観に共感してゆく姿勢に魅了されたことが思い出として語られているが、そうした吉田の作品との出会いが、『風景の詩学』に見られるような著者自身の文学観の形成に大きく貢献していることは容易に想像できることである。そして、副題にある「批評と研究の狭間で」という著者の文学に接する基本姿勢もまた、若き日に吉田の文学鑑賞術への傾倒によって培われたものであることは明白である。ちなみに本書の表題『新=東西文学論』は吉田の『東西文学論』にちなんで名づけられたもの、著者の吉田への敬愛の思いがいかにばかりか、そこから読み取れるであろう。

また澁澤については、彼の作品のボルヘス流のオカルト的趣味傾向とその特異なダンディズムについて繰り返し語られているが、そこにペイター研究を極め付きとする富士川さん独自の唯美主義的文学への傾倒の素地を見出せるようだ。富士川さんは澁澤の愛用した「リヴレスク」(*livresque*)という言葉、澁澤文学を表現するにもっともふさわしい言葉としてしばしば引用している。英語で言えば“bookish”、本来は「多少とも羨望をまじえた貶価的な意味合いを込めて」（334頁）使われる言葉だそうであるが、こと澁澤を語るには、この言葉が最大の賛辞になるのだという。彼独特の「エクソシズム嗜好」や「緊迫した硬質でしかも明晰な文体」（328頁）は、彼の幻想的文学の読書遍歴から獲得された浩瀚な知識がその背景にあって、初めて成立したものだということである。しかし、このことは一面富士川さんの文学的特徴を適切に表現するもので、『新=東西文学論』も、古今東西の幻想文学の知識を自由自在に操り、それを古典的な明晰な文体で統一しているところなどは、見方によっては澁澤のそれと同様、極めて良質な「リヴレスク」な作品と言えなくもない。ときに学問的造詣の粋を尽くした研究あり、ときにジャーナリズム的評論あり、「批評と研究の狭間」を自由自在に往来する富士川さんのスタイルは、まさしく「リヴレスク」という言葉を冠するにふさわしいものである。

もちろん、評者として本書のこまかな内容については多少異論を抱く部

分もない訳ではない。だが、細かなことはさておいて、同じ世代の文学愛好家として特に本書に強い共感を抱くのは、文学に対する著者の根本的姿勢である。本書の「あとがき」で、今日このごろの「理論や方法論ばかりが突出し、論者の個性的で柔軟な読みを提示されることがまことに少なく、どれもがほとんどおなじような、まるで金太郎飴みたいな味けない規格型の論文が次々に量産されている現状」を慨嘆して、富士川さんは次のように述懐している。「わたしにとって、自分が興味を感じたり感動した文学作品を、感動の押売だけはどうしても嫌だから、どのように客観的に分析し、どのように論理の筋道をつけながら語るかということが、当初から自分自身にあたえた最小限の課題だったと言ってよいだろう。そのような基本姿勢でやってきたのである。(中略)作品のほうが、理論や方法よりもわたしにはずっと魅力的であったからだ」(344-45頁)。この文学作品そのものへ寄せる著者の揺るぎのない愛情と信頼こそが、この『新=東西文学論』の真髄であり、最大の魅力なのである。

(南山大学名誉教授)